

九州共立大学

防火防災対策マニュアル

令和4年度作成版

目 次

まえがき	1
第1章 災害発生時における緊急連絡先	2
1 緊急連絡先	2
2 連絡方法の注意事項	2
3 災害発生後の安否等連絡先	3
第2章 災害に対する事前の対策・災害発生から避難までの対応	3
第1節 日常の留意事項	3
1 登校・通勤時	3
2 下校・帰宅時	3
3 授業中	4
4 研究室、実験室等での実験・研究時	4
5 学生宿舎	4
6 教職員	5
第2節 火災に対する事前の対策・火災発生時の対応	5
1 火災の発生に備えて	5
2 火災を発見したとき	5
3 消火設備の使用方法	6
4 119番通報	6
5 避難指示	6
6 避難するときの注意	6
7 避難状況の確認	7
第3節 地震に対する事前の対策・地震発生時の対応	7
1 地震の発生に備えて	7
2 地震が発生したとき	7
3 建物の崩落等の危険を発見したとき	8
4 119番通報（負傷者）	8
5 避難指示	8
6 避難するときの注意	8
7 避難状況の確認	9
第4節 風水害に対する事前の対策・風水害発生時の対応	9
1 風水害の発生に備えて	9
2 風水害の危険が迫ったら	9
3 台風が通過しているとき	9
4 119番通報（負傷者）	9
5 風水害の危険が通り過ぎたら	9

第3章 防災隊の活動及び復旧時の対応	10
第1節 勤務時間内における防災隊の活動	10
第2節 勤務時間外における防災隊の活動	10
第3節 復旧時の対応	11
1 被災後の安全確認	11
2 復旧対策	11
第4章 災害発生時の対応フロー	12
1 災害発生時の共通対応フロー	12
2 災害発生時の災害対策本部長対応マニュアル	13
3 災害発生時の防災隊長対応マニュアル	14
4 災害発生時の教員対応マニュアル	15
5 災害発生時の職員対応マニュアル	16
6 災害発生時の学生対応マニュアル	17
7 災害発生時の学生宿舎入居者対応マニュアル	18
第5章 各地区別避難場所	19
第6章 救急措置	20
1 手当の方法	20
(1) 傷	20
(2) 骨折、捻挫、脱臼	21
(3) 火傷	21
(4) けいれん	22
(5) 熱中症	22
(6) 急性アルコール中毒	23
(7) 薬品による中毒	23
(8) ガス中毒、酸素欠乏	23
(9) 感電	24
(10) 溺水	24
(11) 寒剤による凍傷	24
2 人工呼吸・心臓マッサージ	24
・AEDを用いた心配蘇生法の流れ	27
・AEDの使用方法	28
3 けが人の運び方	29
参考資料 九州共立大学防災の心得	30
AEDの設置場所	31
各学舎の消火設備設置場所	32

ま え が き

大学においては、様々な教育・研究活動が行われており、それに携わる学生及び教職員等の災害時における安全確保・安全管理に関する知識を予め周知徹底しておくことは極めて重要です。

近年、日本では、津波・地震・台風・大雨といった災害に見舞われており、本学においては防災及び安全教育の観点から、毎年、防火・防災訓練を実施しています。

今回、更に防災に対する全学共通の理解を図るとともに、教育・研究活動中の安全を確保し、突然の災害にも速やかに適切な対処ができることを目的として、この小冊子「防火防災対策マニュアル」を作成しました。

本マニュアルは、災害時（特に地震発生時）及び本学にはスポーツ学部があるため、基本的事項に対処できる原則的な対処方法等を示していますが、日頃から自覚を持ち、災害が発生した場合には、本マニュアルに基づき迅速且つ臨機応変な対応を実践するように心がけて下さい。

第1章 災害発生時における緊急連絡先

学生及び教職員（以下「学生・教職員等」という。）が、大学施設内において、地震、風水害その他の自然災害並びに火災及び爆発等（以下「災害」という。）に遭遇した場合は、直ちにその状況を判断し、次の緊急連絡手順により連絡をする。

1 緊急連絡先

管理区域	第1報	第2報	第3報
深耕館・部室棟・学思館	深耕館 総務課 093-693-3173	総務課 093-693-3005	法人管財施設課 093-693-3284
耕技館	記念館管理人 093-693-3168		
鶴鳴記念館	記念館管理人 093-693-3168		
学術情報センター・図書館・自由ヶ丘会館	自由ヶ丘会館管理人 093-693-3302		
第二体育館・売店棟	総務課事務室 093-693-3173		
スポーツ学部A館	スポーツ学部A館事務室 093-693-3431		
スポーツ学部B館・プール棟・セミナーハウス	プール棟管理人 093-693-3438		
その他	総務課 093-693-3005		

2 連絡方法の注意事項

学生・教職員等で災害を発見した場合は、授業・勤務等の内外に関わらず、第1報先に連絡（通報）する。以後、当該各所掌担当が連絡し、対応する。

連絡のポイントは以下のとおり。

- ① 災害情報は、一部不明な項目があっても知り得た情報の範囲内で、直ちに第1報を行う。
- ② 知り得た内容が、緊急・異常事態に該当するかどうか判断に迷った場合は、まず、緊急・異常事態とみなし、対応する。

3 災害発生後の安否等連絡先

学生・教職員等が各人の安否確認その他各種情報について報告する場合は、次の電話番号、又は電子メール等により連絡する。

(1) 学生、教職員の場合

・ 守衛所（昼間）： ☎ 093-693-3383（携帯：070-2332-5616）

守衛室（夜間）： ☎ 093-693-3194（携帯：070-2332-5616）

・ 安否メール： ✉ soumu@kyukyo-u.ac.jp

・ 九州共立大学のホームページ： <http://www.kyukyo-u.ac.jp/>

・ 以下は状況に応じて連絡する。

・ 学生の場合

● キャリア支援課： ☎ 093-693-3241・3003

3433・3192

(FAX：093-693-3430)

● ゼミ等担当教員

● 学部事務室（経済学部）： ☎ 093-693-3172

（スポーツ学部）： ☎ 093-693-3431・3039

● クラブ担当教職員

・ 教職員の場合

● 総務課： ☎ 093-693-3005・3046・3173

(FAX 093-603-8186)

● 教員は、学部長・学科長

● 職員は、部長・各課課長

第2章 災害に対する事前の対策・災害発生から避難までの対応

第1節 日常の留意事項

1 登校・通勤時

- (1) 授業・研究及び業務等を行うのに相応しい服装と履き物を着用する。
- (2) 緊急時に救急車、消防自動車の通行妨害にならないよう、自転車、自動二輪車、自動車は所定の場所に置き、無許可で自動車等の乗り入れはしない。
- (3) 自室の戸締まりやガス、電気等の火気の始末には十分留意する。
- (4) キャンパス全面禁煙

2 下校・帰宅時

- (1) ガスの元栓を閉める。
- (2) 必要でない電気器具のコンセントは抜いておく。
- (3) 留守番電話にする。
- (4) その他窓閉め等の安全を確認後、消灯のうえ施錠して退室する。

3 授業中

- (1) 倒れ掛かりそうなものや照明器具など頭上から落ちてくるものに注意する。
- (2) ガラス・鏡の破損による怪我をしないよう、ガラス・鏡の周りでは十分注意する。
- (3) 電源を必要とする時、いわゆるたこ足配線は止める。
- (4) 日頃から避難経路や消火器・消火栓の場所を知っておく。

4 研究室、実験室等での実験・研究時

- (1) 冬季間の暖房器具（灯油、電気、ガストーブ）の利用にあたり、その近くに可燃性・引火性の物を置かないこと。また、部屋を空けるときは、すぐ戻る場合であっても無人になる時は火を消す。
- (2) 電源を必要とする時、いわゆるたこ足配線は止める。
- (3) 研究室、実験室等は、常に整理・整頓し、避難の妨げにならないようにしておき、事故及び火災の原因を作らない。
- (4) 実験・研究等が夜間に及ぶとき又は休日に実験を行うときは、予め施設使用届けを提出すること。
- (5) 冬季間において、実験・研究等のため仮眠をとる場合は、暖房器具等は消すことが望ましいが、やむを得ず暖房器具等を使用する場合は、酸素欠乏にならないよう換気に十分注意すること。また、仮眠の際は、衣類の引火に十分注意する。
- (6) 最後に退室するときは、不必要な電気のコンセントは抜き、安全を確認後、消灯のうえ施錠して退室する。
- (7) 日頃から避難経路や消火器・消火栓の場所を知っておく。
- (8) 研究室・実験室等の周り（廊下等）に、避難に妨げになるものは置かない。

5 学生宿舎

- (1) 緊急時に救急車、消防自動車の通行妨害にならないよう、自転車、自動二輪車、自動車は所定の場所に置き、無許可で自動車等の乗り入れはしない。
- (2) 居室の戸締まりやガス、電気等の火気の始末には十分留意する。
- (3) 室内は、常に整理・整頓し、避難の妨げにならないようにしておき、事故及び火災の原因を作らない。
- (4) たこ足配線はせず、常にコンセントの周囲を清掃し、埃等を取り除く。
- (5) ベッドの位置はなるべく窓際から離す。
- (6) 窓ガラス等は破損して散乱する危険性があるので、就寝時は障子戸・カーテン等を閉め、上履きを身近におく。
- (7) 外出時に心がける事項
 - ① ガスの元栓を閉める。
 - ② 必要でない電気器具のコンセントは抜いておく。
 - ③ その他安全を確認後、消灯のうえ施錠して外出する。
- (8) 廊下や出入口付近に、避難に妨げになるものは置かない。

6 教職員

- (1) 教職員は率先して、学生や施設の安全に配慮する。
- (2) 学生の不注意に気がいたら、できるだけその場で注意する。
- (3) 大学施設内で不審者を見つけたら、学生か否かを確認し、必要な対応を行う。
- (4) 日頃から避難経路や消火器・消火栓の場所を知っておく。
- (5) 事務室内等は、常に整理・整頓し、避難の妨げにならないようにしておき、事故及び火災の原因を作らない。
- (6) なるべくたこ足配線はせず、常にコンセントの周囲を清掃し、埃等を取り除く。
- (7) 夏期休暇、年末年始休暇など、長期休暇に入るときは、事務室内の不要な電源（電気ポット、コーヒーマーカー、電子レンジなど）は切る。また、課内で課員の行き先や連絡先を把握しておく。

第2節 火災に対する事前の対策・火災発生時の対応

1 火災の発生に備えて

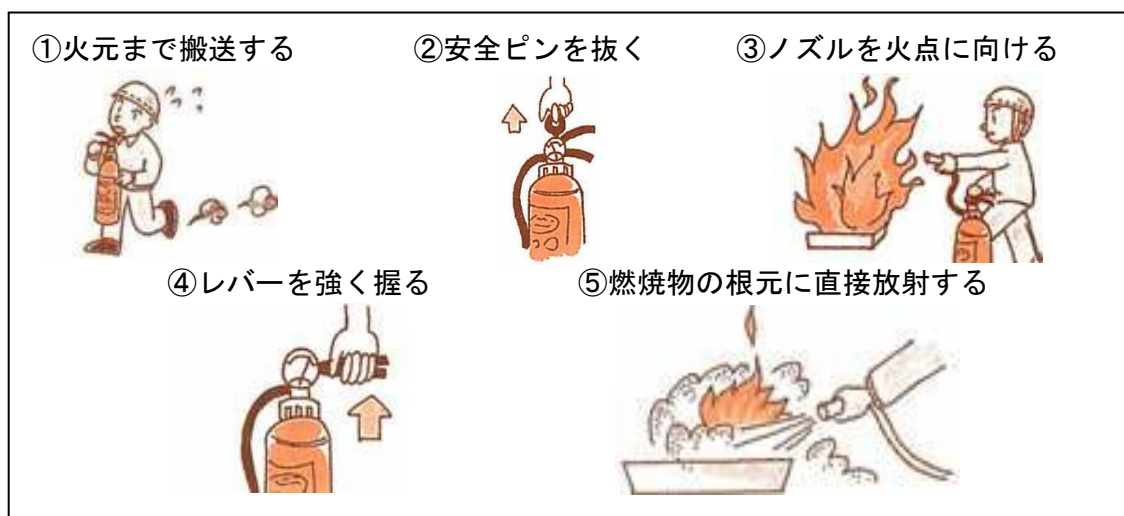
- ① 消火器、屋内消火栓及び火災報知器等の設置場所と使用方法を平素から確認し、熟知しておく。
- ② 「火気厳禁」の場所では、火気の使用を絶対にしない。
- ③ 火気のそばに可燃性・引火性の物を置かない。
- ④ 電気器具、ガス器具などの点検を怠らず、定められた方法で使用する。
- ⑤ ヒーター、電気ストーブなどを点火したまま部屋を離れない。また、退室時には、電源を切る。
- ⑥ 実験室、居室等建物内の整理・整頓に心がけ、安全な避難路を平素から確保しておく。また、非常口の近くや、防火扉の前には物を置かない。

2 火災を発見したとき

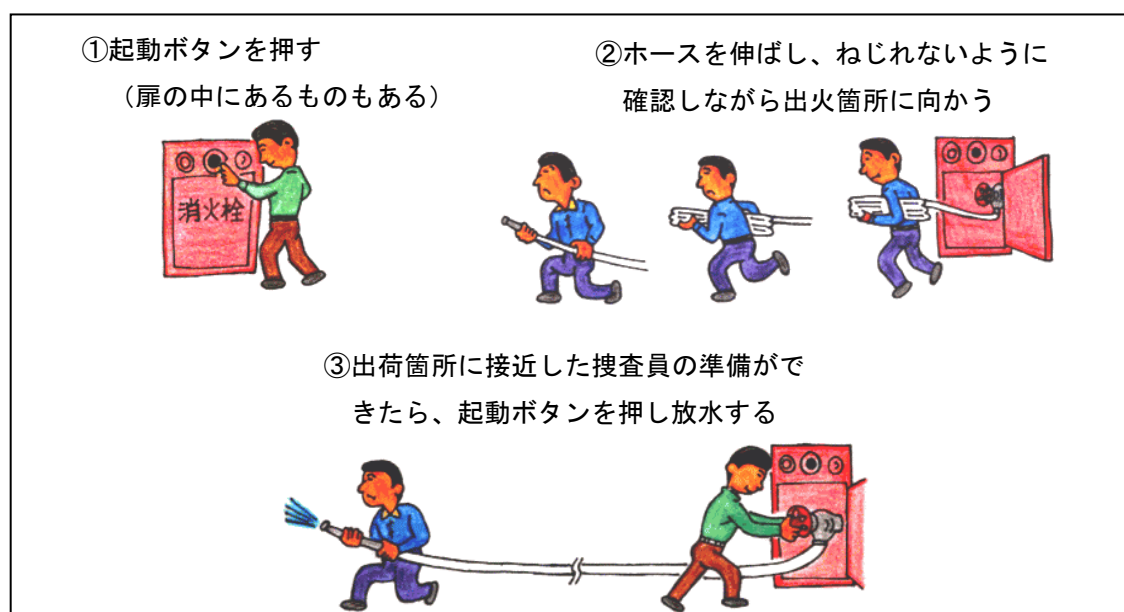
- ① あわてず、おちついて「火事だ！火事だ！・・・」と大声で周囲に知らせ、火災報知器のボタンを押した後、総務課もしくは一番近い事務室等へ連絡（一刻を争う場合は119番通報して火災を知らせる。（6ページ4を参照））
- ② 可能ならば初期消火に努める。その際、次の点を心がける。（消火設備等の使用方法は6ページ3を参照）
 - ア 近くにある消火器や屋内消火栓ポンプを作動させて消火に努める。
 - イ 衣類などに火が着いた場合には、直ちに水をかぶる。あるいは床に転がり消火を試みる。
 - ウ 燃えやすい物を火元から遠ざける。
- ③ 火勢が強く消火が困難な場合には、直ちにその場から避難する。

3 消火設備の使用方法

① 消火器の使い方



② 屋内消火栓の使い方



4 119番通報

落ち着いて火災発生現場（八幡西区自由ヶ丘1-8 九州共立大学）の位置と目標、火災状況及び避難状況を正しくハッキリと知らせる。（分かる範囲内でよい。）

5 避難指示

放送設備又は電話を使用、無理ならば、教職員が各室を回り口頭連絡する。

6 避難するときの注意

- ① 姿勢を低くして、濡れたハンカチやタオルを口と鼻に当て、煙を吸わないようにする。

- ② 非常持ち出し品を持って避難する。
- ③ エレベーターは使用しない。
- ④ 施設に不慣れな来客者や障害者などの避難を積極的に支援する。
- ⑤ 延焼を少しでも抑えるために、ドアや窓は閉める。鍵はかけない。
(ただし、地震のときはドアが変形して開かなくなることがあるので、開放して避難する。)
- ⑥ 一旦避難したら再び中には戻らない。

7 避難状況の確認

- ① 避難誘導班は、学生・教職員等の安否（避難完了者、負傷者、要救助者等）について確認し、指揮班の長に報告する。
- ② 学生・教職員等は、安否確認のため大学に所在を知らせる。（本人だけでなく友人・同僚等に関して知り得る安否等の情報を連絡）

ア 学生の場合

- ・ キャリア支援課
- ・ ゼミ担当教員（キャリア支援課に必ず報告）
- ・ クラブ・サークル担当教職員（キャリア支援課に必ず報告）

イ 教職員の場合

- ・ 各学部長
- ・ 総務課
- ・ 各課課長

第3節 地震に対する事前の対策・地震発生時の対応

1 地震の発生に備えて

- ① 危険物は、日常的に使用する物でも、倒れたり、落下したり、振動しないような状態にして管理する。
- ② 重い装置や書架などは、床、壁あるいは柱などに固定する。
- ③ 必要以上に物品を積み上げない。また、物品を収納する場合は、できるだけ重量物を下に置くよう心がける。
- ④ 消火器、屋内消火栓及び火災報知器等の設置場所と使用方法を平素から確認し、熟知しておく。
- ⑤ 実験室、居室等建物内を整理・整頓し、安全な避難路を平素から確保しておく。また、非常口の近くや、防火扉の前には物を置かない。

2 地震が発生したとき

- ① 地震発生直後（自分の身を守る）
 - ア とりあえず丈夫なテーブルや机などの下に避難する。または、壁や柱の近くに身を寄せる。
 - イ 落下物、転倒物から、特に頭部を守る。

ウ ドアを開けて非常脱出口を確保する。

エ あわてて外に飛び出さない。

オ エレベーターの中にいる場合、全ての階のボタンを押し、停止した階で降りる。閉じ込められたら、非常ボタンを押して救助を待つ。

カ 自動車を運転中は、ゆっくりと道路の左側に寄せてエンジンを切る。

② 揺れがおさまった後

ア 使用中の火気、薬品等を処置すること。

イ 電気器具のプラグをコンセントから抜く。

ウ 倒れやすくなっているもの又は落下しやすくなっているものは、応急処置する。

エ 負傷者がいたら救急措置をとり、必要に応じて応援を求める。(重傷で一刻を争う場合は119番通報)

オ 避難する際は、周囲の安全を確かめながら、速やかに最寄りの避難場所に避難する。

カ 自動車を運転中は、ラジオ等で状況を把握する。避難する際は、連絡メモを残し、キーはつけたまま、車検証を持って徒歩で避難する。

3 建物の崩落等の危険を発見したとき

① 大声で周囲に知らせた後、総務課もしくは一番近い事務室等へ連絡して、当該危険を知らせる。

② 危険地域には絶対に近づかない。

4 119番通報(負傷者)

落ち着いて負傷者の位置(八幡西区自由ヶ丘1-8 九州共立大学内の〇〇)と状況、負傷した理由等を正しくハッキリと知らせる。(分かる範囲でよい)

5 避難指示

放送設備又は電話を使用、無理ならば、教職員が各室を回り口頭連絡する。

6 避難するときの注意

① エレベーターは使用しない。

② 非常持ち出し品を持って避難する。

③ 施設に不慣れな来客者や障害者などの避難を積極的に支援する。

④ ドアが変形して開かなくなることがあるので、開放して非難する。

⑤ 落下物に注意し、頭部を守る。

⑥ 倒れやすい物には近寄らない。

⑦ 出火時は、姿勢を低くして、濡れたハンカチやタオルを口と鼻に当て、煙を吸わないようにする。

⑧ 一旦避難したら再び中には戻らない。

7 避難状況の確認

- ① 避難誘導班は、学生・教職員等の安否（避難完了者、負傷者、要救助者等）について確認し、指揮班の長に報告する。
- ② 学生・教職員等は、安否確認のため大学に所在を知らせる。（本人だけでなく友人・同僚等に関して知り得る安否等の情報を連絡）

ア 学生の場合

- ・キャリア支援課
- ・ゼミ担当教員（キャリア支援課に必ず報告）
- ・クラブ・サークル担当教職員（キャリア支援課に必ず報告）

イ 教職員の場合

- ・各学部長
- ・総務課
- ・各課課長

第4節 風水害に対する事前の対策・風水害発生時の対応

1 風水害の発生に備えて日頃から施設・設備の維持管理に努める。

- ・屋上のルーフトレイン周りの掃除
- ・屋外排水溝の掃除

2 風水害の危険が迫ったら

- ① 最新の気象警報、洪水予報などの災害情報を入手する。
- ② 休講など、学生等の安全確保の措置を講じる。
- ③ 構内やその周辺、屋上等に強風で飛散しやすい物を設置しないようにする。
- ④ 看板、サッカーゴール等の転倒すると危険な物は、撤去又はあらかじめ倒しておくなどの措置を講じる。
- ⑤ 窓は鍵をかけ、出入口のドアは閉鎖し、必要に応じてガラスの外部面を保護する。
- ⑥ 浸水の恐れがある地区では、必要に応じて土のうなどをあらかじめ設置する。
- ⑦ 重要な書類、機器類、図書類、教材類や薬品類等の危険物を安全な場所へ移動する。
- ⑧ 停電に備えて、パソコンのデータは保存し、懐中電灯等を用意する。

3 台風が通過しているとき

待避している学生・教職員等に、学内放送・メール等で状況を周知する。

4 119番通報（負傷者）

落ち着いて負傷者の位置（八幡西区自由ヶ丘 1-8 九州共立大学）と状況、負傷した理由等を正しくハッキリと知らせる。（分かる範囲でよい）

5 風水害の危険が通り過ぎたら

- ① 被害状況を調査し、状況に応じた復旧活動を計画・実施する。

- ② 最新の交通情報を学内放送・メール等で周知し、帰宅困難者を把握する。

第3章 防災隊の活動及び復旧時の対応

第1節 勤務時間内における防災隊の活動

- 1 統括管理者は、直ちに防災隊員を招集・編成し、防災活動にあたる。
 - ① 防災隊員は、速やかに指定された班の任務につき、適宜統括管理者にその活動報告を行うとともに、指示を仰ぐ。
 - ② 防火管理者は、被害の状況を統括管理者に報告する。
 - ③ 被害の状況に応じた復旧活動を計画・実施し、応急対策及び復旧状況を統括管理者に報告する。
- 2 防火管理者は、統括管理者の指示に基づき、帰宅可能な学生・教職員等を帰宅させ、帰宅不可能な学生・教職員等は最寄りの避難場所に収容するとともに、帰宅者及び学内待機者の氏名を把握する。
- 3 学内に待避した教職員等は、災害対策本部の指示のもと、学内の保全・避難住民に対して必要な対応及び学生等の安否確認等に協力する。

第2節 勤務時間外における防災隊の活動

- 1 自宅の被災状況により通勤可能な教職員等は、家族の安全を確認した後、速やかに出勤する。
- 2 出勤不可能な教職員等は自宅等で待機し、大学等にその状況報告を行い、指示を仰ぐ。
- 3 統括管理者は、出勤した者によって直ちに防災隊員を招集・編成し、防災活動にあたる。
 - ① 防火管理者は、被害の状況を統括管理者に報告する。
 - ② 被害の状況に応じた復旧活動を計画・実施し、応急対策及び復旧状況を統括管理者に報告する。
- 4 防火管理者は、統括管理者の指示により、帰宅可能な学生・教職員等を帰宅させ、帰宅不可能な学生・教職員等を最寄りの避難場所に収容するとともに、帰宅者と学内待機者の氏名を確認する。
- 5 学内に待避した教職員等は、非常対策本部の指示のもと、学内の保全、避難住民に対して必要な対応及び学生等の安否確認等に協力する。

第3節 復旧時の対応

1 被災後の安全確認

- ① 二次災害の防止措置を確認後、危険箇所への立入禁止措置などの安全策を講じる。
- ② 施設に異常が認められる場合には、専門家へ依頼するなどして、安全性の確認を行う。
- ③ 浸水等により施設内が汚染された場合には、清掃に加え、防疫薬剤の散布など衛生管理に必要な措置を講じる。
- ④ 電気、ガス、水道などのインフラ施設の機能・安全性を確認する。
- ⑤ 灯油や薬品などの危険物の漏れ出しがないか確認する。
- ⑥ 活動時には、けがをしないように長袖を着用し、落下物に備えヘルメットを着用する。

2 復旧対策

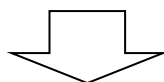
- ① 被災施設の応急復旧の措置を講じる。
- ② 被害状況の調査、写真等の資料とともに現状を記録する。
- ③ 重要な業務に係る書類を確認し、保管する。
- ④ 物品や現金等に対する防犯対策を講じる。
- ⑤ 非常時の会計処理と給与支払方法等を明確にする。
- ⑥ 早期復旧のため、関係機関への被害報告等を行う。

第4章 災害発生時の対応フロー

1 地震発生時の共通対応フロー

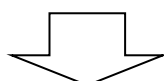
地震発生時の対応

- 1 まず、身を守る！
 - ・机、実験台、食卓の下などにもぐる。
 - ・余裕がなければ、手近なもので頭を保護する。
- 2 すばやく火元の始末！
 - ・ガスの元栓、電気コンセント、実験器具など処置する。
- 3 非常口の確保！
 - ・ドアを開ける。
- 4 緊急連絡先による連絡！
 - ・一番近い事務室（一刻を争う場合は消防署（119））に正確に連絡する。



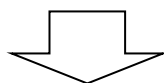
地震発生直後の対応

- 1 火元の確認！
 - ・火が出たら、大声で周囲に知らせ、火災報知器のボタンを押した後、一番近い事務室へ連絡。その後可能であれば、落ち着いて初期消火をする。
- 2 周囲の人の安全を確認！
 - ・倒れた書庫等の下敷きや、けが人の確認をする。
- 3 作動中、作業中の実験機器等の停止！
 - ・スイッチ等を切る。



地震発生後の対応

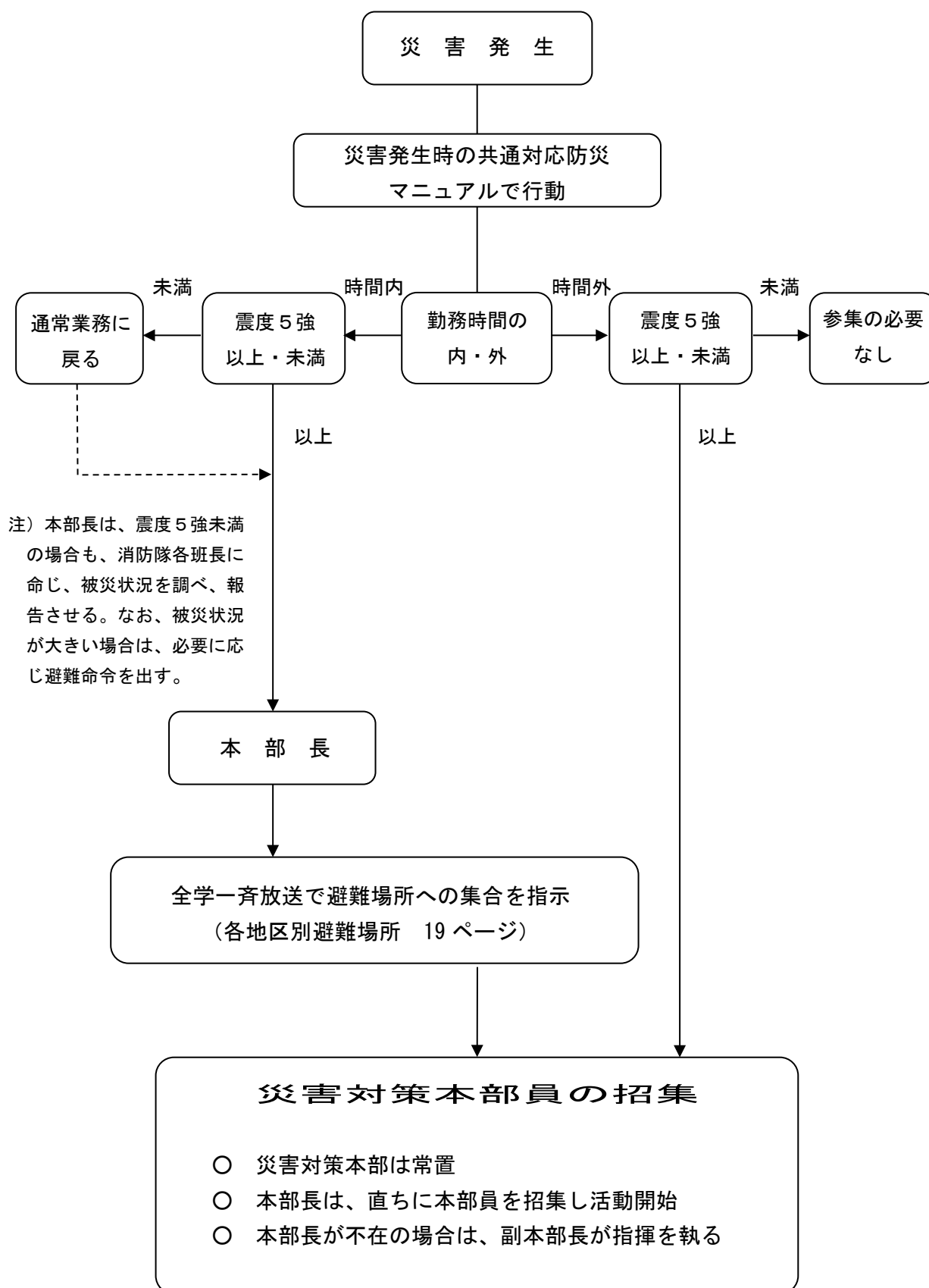
- 1 隣接する部屋等で助け合う！
 - ・他の部屋・教室等で倒れた書庫等の下敷きや、けが人の確認をする。
- 2 その後の余震に注意！
 - ・建物の状況により、余震で崩壊する恐れのある場合は、指定の避難場所に避難する。



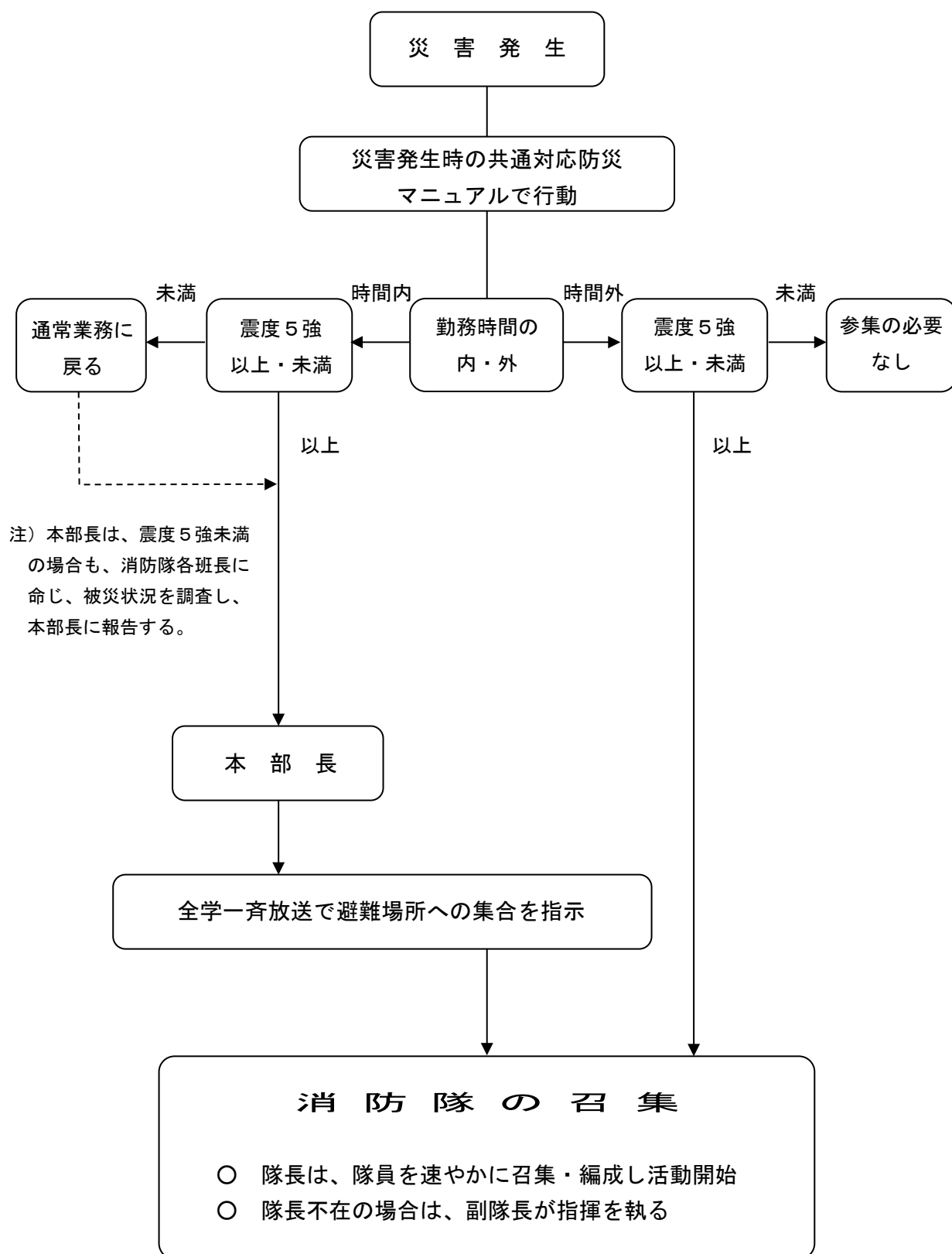
各種別の対応マニュアルによる対処

【統括管理者、防火管理者、教員、職員、学生等】

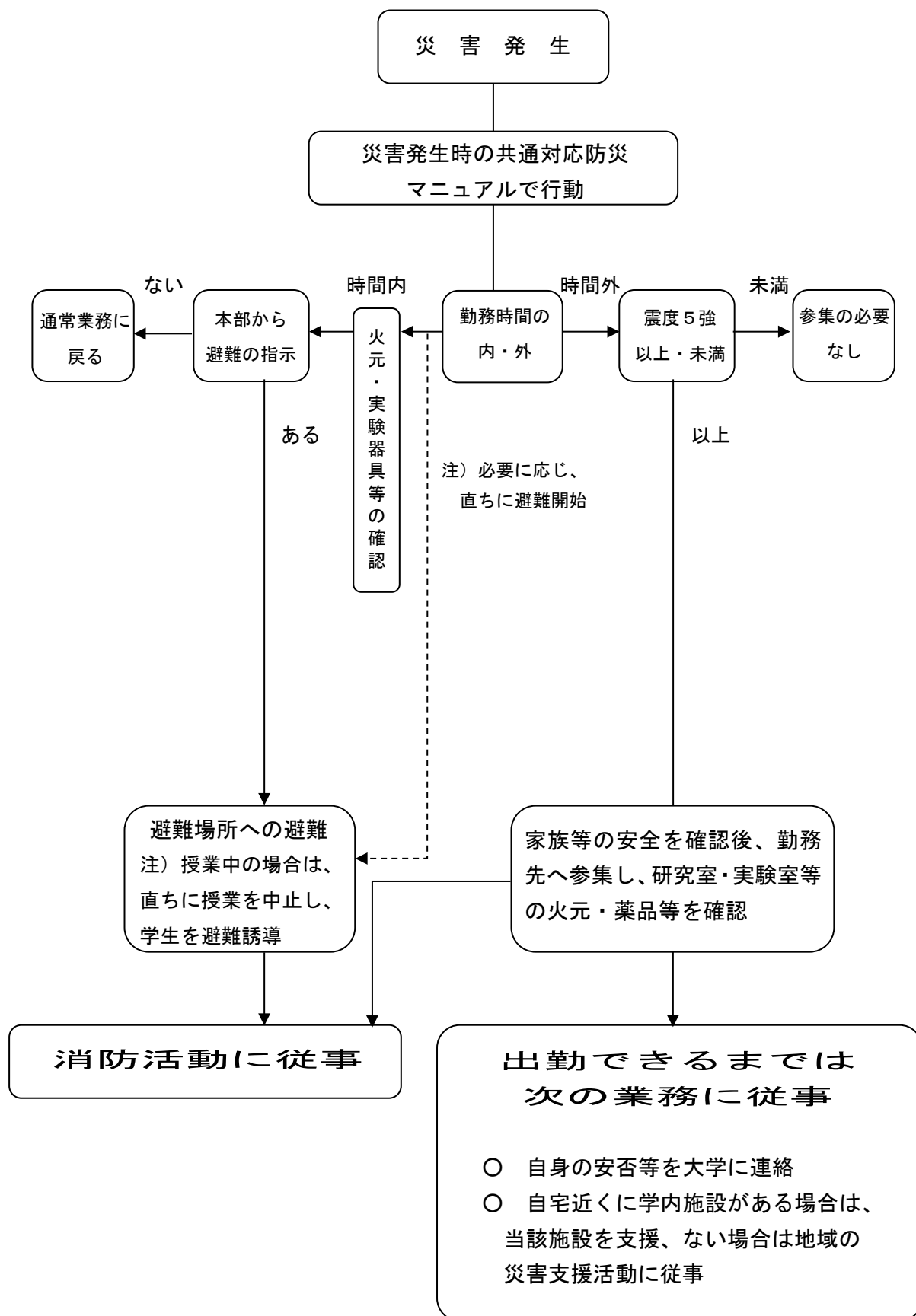
2 災害発生時の対策本部長対応マニュアル



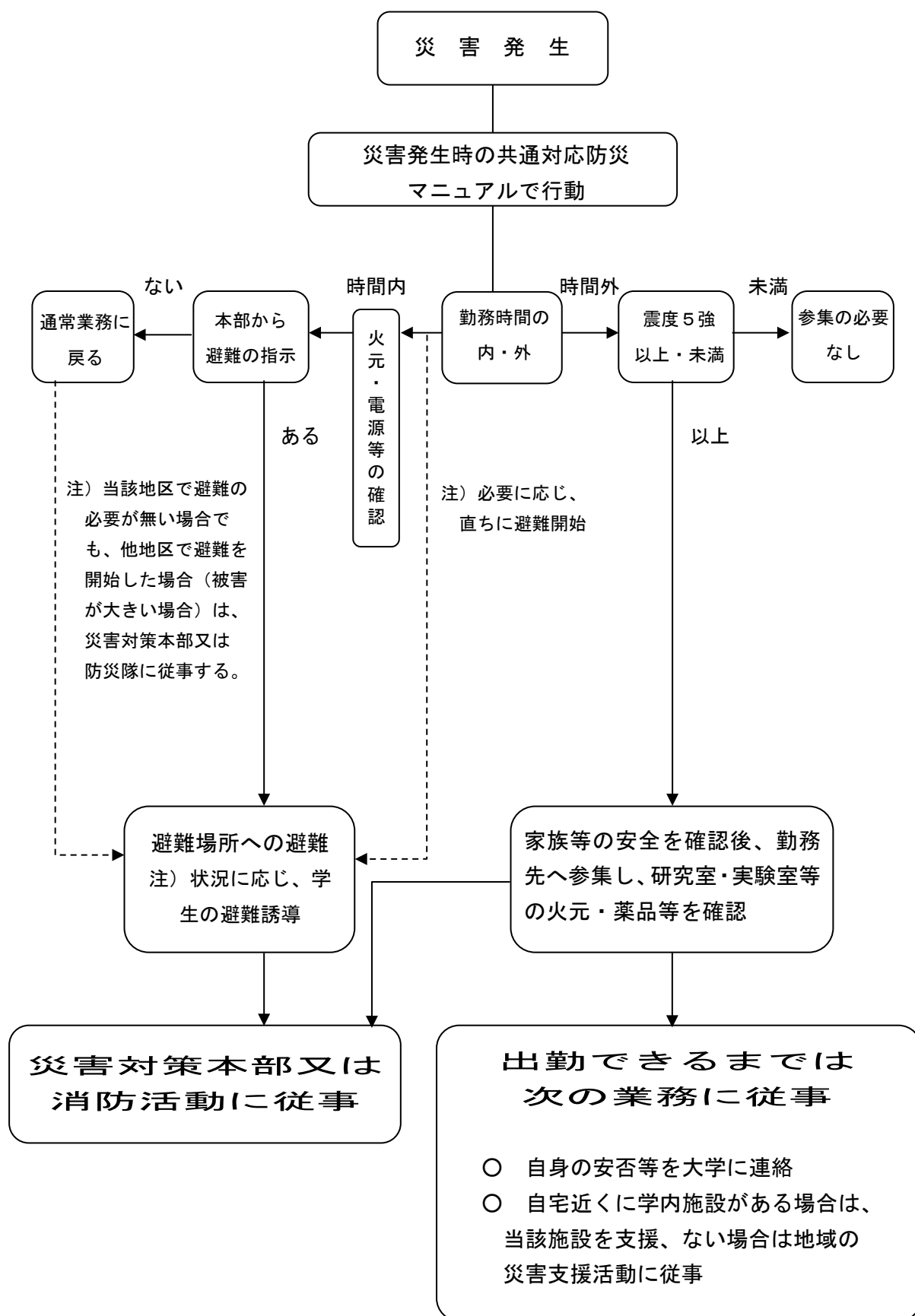
3 災害発生時の消防隊長対応マニュアル



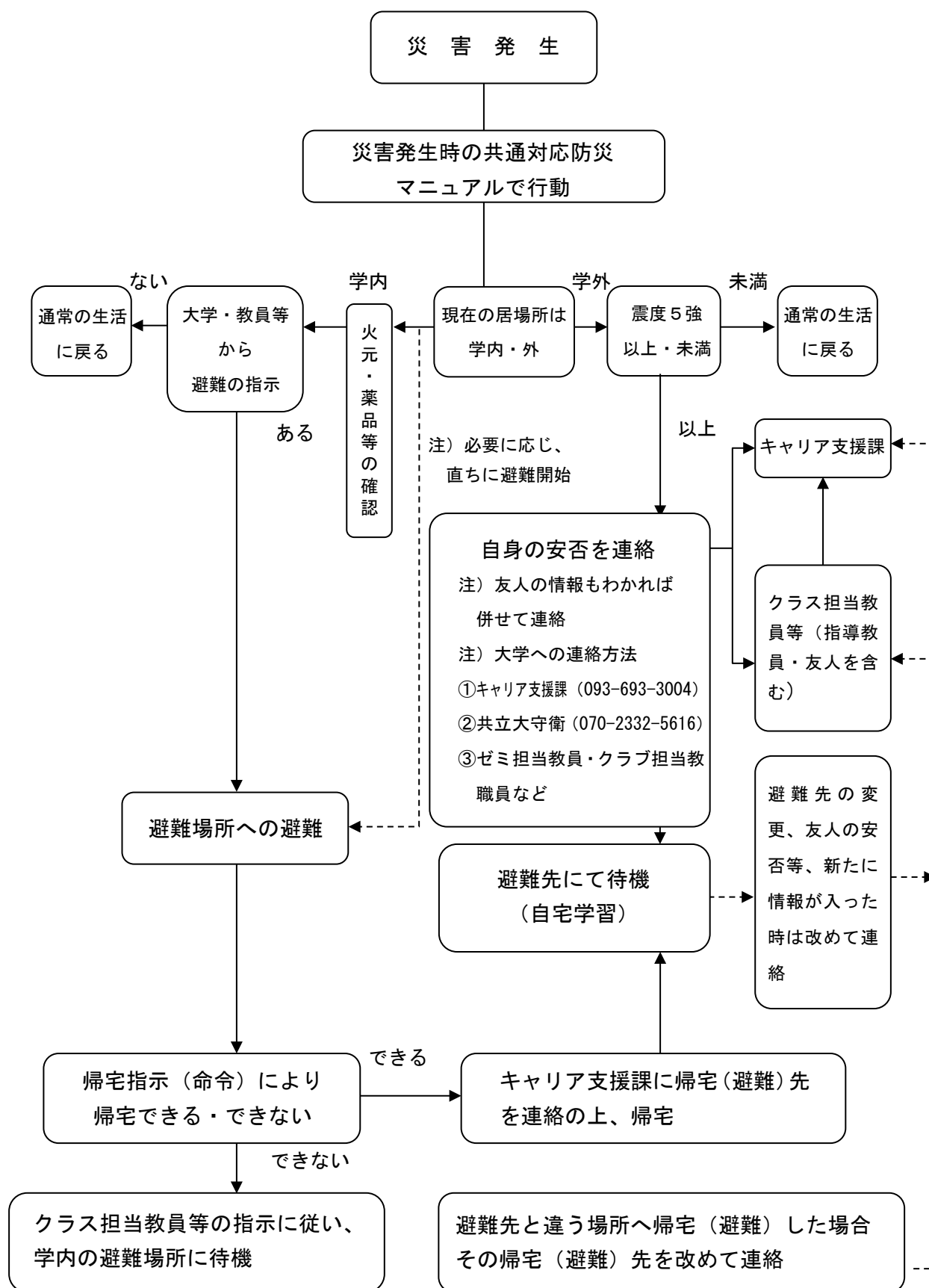
4 災害発生時の教員対応マニュアル



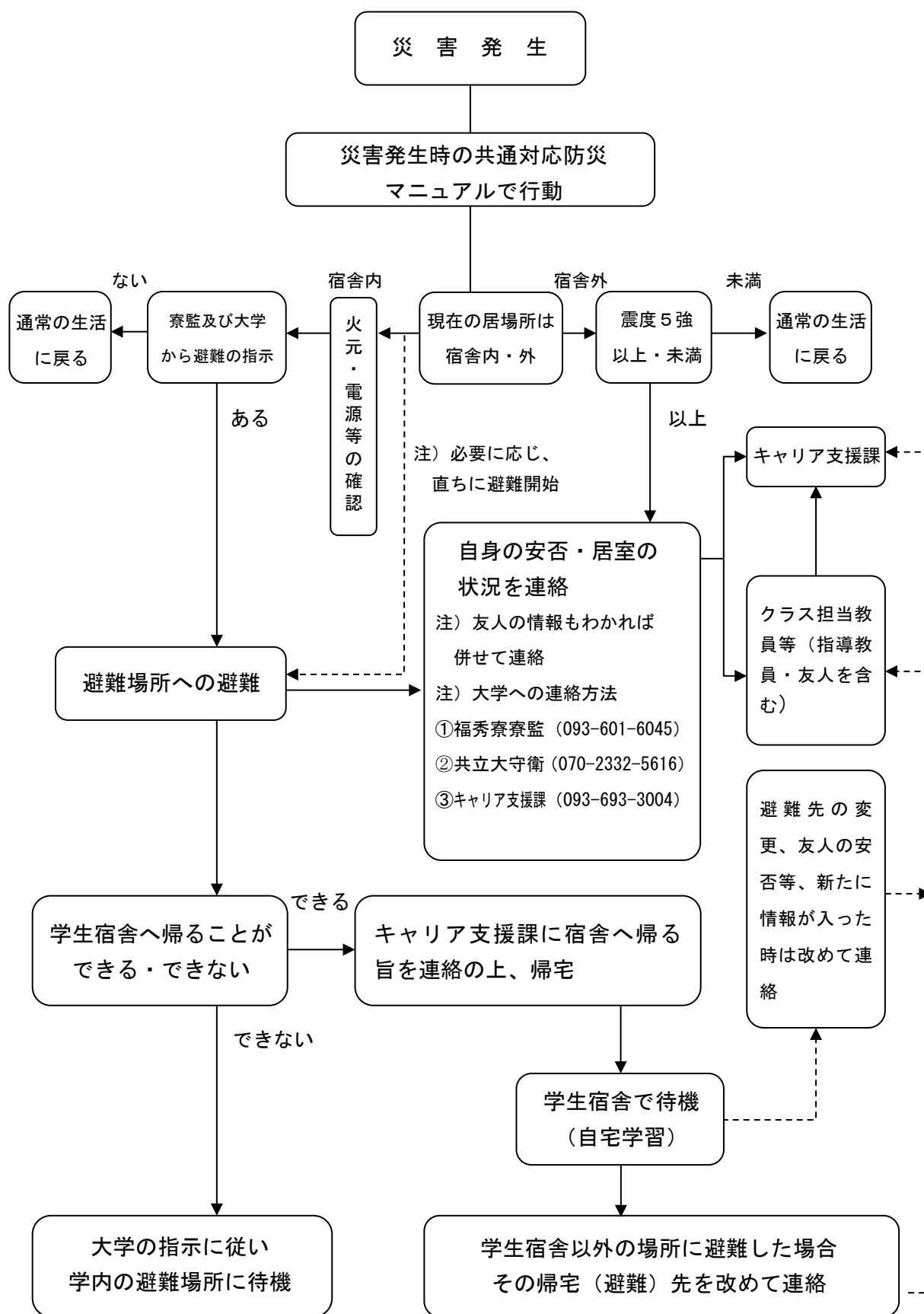
5 災害発生時の職員対応マニュアル



6 災害発生時の学生対応マニュアル



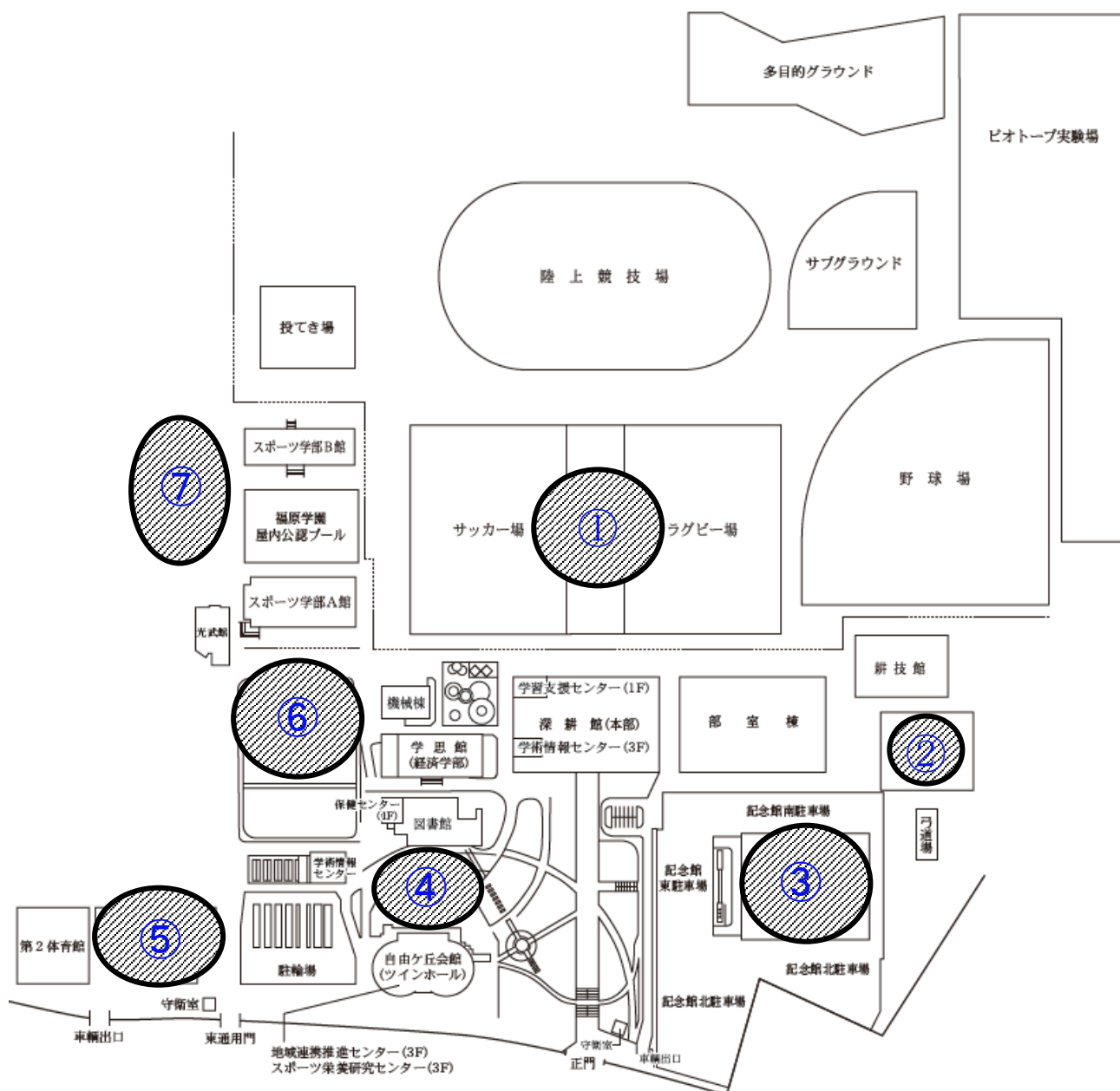
7 災害発生時の学生宿舍入居者対応マニュアル



第5章 各地区別避難場所

本学における一時避難場所は次のとおりとする。

- | | | |
|---|-----------------------------|-------------------|
| ① | 深耕館・部室棟・学思館の学生及び教職員 | ・ ・ ・ サッカー・ラグビー場 |
| ② | 耕技館の学生及び教職員 | ・ ・ ・ 耕技館前駐車場 |
| ③ | 鶴鳴記念館の学生及び教職員 | ・ ・ ・ 鶴鳴記念館前駐車場 |
| ④ | 学術情報センター・図書館・自由ヶ丘会館の学生及び教職員 | 自由ヶ丘会館前広場 |
| ⑤ | 売店棟・第二体育館の学生及び教職員 | ・ ・ ・ 東門駐車場 |
| ⑥ | スポーツ学部A館の学生及び教職員 | ・ ・ ・ スポーツ学部A館前広場 |
| ⑦ | スポーツ学部B館・プール棟・セミナーハウス | ・ ・ ・ プール棟前 |
| ⑧ | その他は最寄りの避難場所 | |



第6章 救急処置

救急処置とは、不慮の事故により負傷したり、あるいは急病が発生した場合、医師がくる（または医師のところへ運ぶ）までの間、応急的、一時的に行う処置、手当てのことであり、大きく2つに分けられる。

(1) 救命処置

死の危険性のある患者の生命を救うために、何よりも優先する。

(2) 救急処置（応急処置）

ケガや病気が悪化するのを予防したり、痛みが和らぐような手当てをする。

1 手当の方法

(1) 傷

傷には、きり傷、刺し傷、すり傷などいろいろあり、その手当法も異なるので注意が必要である。

① きり傷

i) まず出血を止めることが必要である。損傷部を清潔なタオルやガーゼで強く巻いて圧迫して止血する。このとき、長時間圧迫により末梢部位が痛むことがあるが、そのときは圧迫を一時的に緩めてから再び縛って圧迫する。

ii) 傷口が汚れている場合は、きれいな水で洗い流す。

iii) 傷口にガラスや金属片があれば、出来るだけ取り除くことが望ましいが、それを除去することによって、かえって出血を増大させることもあるので注意を要する。

iv) 出血が長引くようなときは、病院（外科）へ行くこと。

② 刺し傷

i) 血を少し絞り出して、ばい菌を押し出す。

ii) 消毒ガーゼなどをあて、包帯をする。

iii) 傷口が小さく、出血量が少なくても、深い所で化膿することがあるので注意すること。

③ すり傷

i) こすらないように注意して、水道の水で洗い流す。

ii) 消毒液を塗る。

iii) 消毒ガーゼをあて、包帯をする。

iv) 痛みが激しいときは、病院（外科）へ行くこと。

④ はさみ傷

i) 急いで冷やす。

ii) 内出血や骨折の可能性もあるので、注意すること。

⑤ ガラスによる傷

i) すぐに止血する。

ii) 破片が刺さった時は、血管壁を貫通している恐れもあるので、抜かずに病院へ行くこと。

- iii) 細片を浴びた時は、そっと払い落とし、皮膚には触れないようにして病院へ行くこと。

(2) 骨折、捻挫、脱臼

① 骨折

- i) 患部が動かないように副木等で固定し、医師の手当を受ける。
- ii) 上腕骨折の場合、骨折部を肩の方に押し上げないように副木をあてて固定し、三角布で前腕を吊す。
- iii) 足首骨折の場合、靴や靴下を脱がせ、副木をあてて、三角布で固定する。
- iv) 肋骨骨折の場合、呼吸が苦しくなるので、布団等にもたれるようにして、呼吸を楽にさせる。
- v) 膝・大腿・下腿の骨折の場合、骨折部分の衣類を切り取り、副木と三角布で固定する。

② 捻挫

- i) 冷湿布を施し、弾性包帯を圧迫するように巻く。
- ii) 包帯のまま冷水に 30 分ほど冷やす。
- iii) 乾いた包帯に取り替え、患部を高くして氷のうなどで炎症がおさまるまで冷やす。
- iv) はれがひどい場合は、医師の手当を受けること。

③ 脱臼

- i) 患部を冷やす。
- ii) 包帯や三角布で動かないように固定し、医師の診断を受けること。
- iii) 血管や神経を痛めることがあるので、自分で関節をもとに戻そうとしないこと。

④ 打撲傷（打ち身）

- i) 手足の軽い打撲は、冷やすことによって痛みや、内出血が軽くなる。
ひどい打撲でショック症状になったら、骨折や内臓損傷のおそれがあるので、保温し早急に医師の所へつれていくこと。
- ii) 頭を打って、意識不明、吐き気、嘔吐、鼻・耳・口からの出血などがある時は、重傷である。直ちに救急車を呼ぶこと。
- iii) 打撲した部分を動かすと内出血が多くなり、苦痛も増すので、その部位を安静にし、手足の場合は心臓より高くすること。

(3) 火傷

- i) 出来るだけ早く流水（水道水でよい）で冷却するのが最も効果的である。
ただし、傷に直接強い水圧を当てないこと。
- ii) 冷却する場合、たえず移動させて、同一部位が冷えすぎないように注意すること。
- iii) 重傷の火傷の場合、清潔なタオルなどで火傷面を覆い、できれば冷却しながら病院に連れて行くこと。

- iv) 衣類の上から火傷をした場合は、無理に脱がせないで、そのまわりを切り取るなどして冷却すること。
- v) 火傷面にチンク油や軟膏などの油剤を塗ると、病原菌に感染しやすくなるので、使用してはいけない。

□ 火傷の深さと症状

深さ \ 症状		外 見	症 状
1 度	表皮やけど	皮膚が赤くなる。	ヒリヒリと痛い。
2 度	真皮やけど	水ぶくれができる。 ぐちゃぐちゃになる。	強い痛みとやけるような感じ。
3 度	全層やけど	皮膚が白くなり、焦げる。	痛みをほとんど感じない。

(4) けいれん

- i) 熱疲労、熱けいれん、日射病、熱射病、低血糖、薬物中毒などのうちで、どの原因によるかを見極める。
- ii) 風通しのよい、涼しい場所に移す。
- iii) 衣類を緩めて楽に寝かせ、毛布などで保温する。
- iv) 嘔吐がある場合、顔を横向きにさせ、吐いたものが気道を塞ぐのを防ぐこと。

(5) 熱中症

① 日射病（熱射病）

直射日光の下、あるいは高い湿度の所で激しい運動をしたとき等になる。

体温が非常に高くなり、汗も出なくなり、顔が赤く、頭痛、めまい、吐き気がある。

日陰などの風通しのよいところに移し、衣類を脱がし、冷たいタオルで体をふく。

② 熱疲労（熱けいれん）

体育館等の湿度の高い場所で、過度の運動をした場合などで、おこすこともある。

汗の出方がひどく、体温はそれほど高くない。顔色が青白く、頭痛、めまい、吐き気がある。

風通しのよい涼しい場所に移し、衣類をゆるめ、楽に寝かせ、毛布などで保温する。意識があれば薄い食塩重曹水を飲ませる。

③ いずれの場合も、意識を失い、けいれんをきたすものは危険であるから、直ちに救急車を呼ぶこと。

どのような状態の下で発症したかをよく確認しておくこと。

□ 日射病・熱射病と熱疲労・熱けいれんの症状

	日射病・熱射病	熱疲労・熱けいれん
皮膚	熱っぽく乾いてくる。	汗でべとべとになる。
顔色	赤くなる。	青白くなる。
脈拍	早い脈が大きく打つ。	弱く、早くなる。 (ふつうのこともある。)
体温	非常に高くなる。	だいたいふつう。
全身症状	頭痛、めまい、吐き気。 ひどいときには意識不明になる。	頭痛、めまい、吐き気、脱力感。 ひどいときには意識不明になる。

(6) 急性アルコール中毒

- i) 昏睡状態で体温が下がり、脈が弱いときには、一刻も早く救急車を呼ぶこと。
- ii) 嘔吐がある場合、顔を横に向け、十分に吐き出させること。
- iii) 一気飲み、強要飲みなどをさせないことが事故防止のうえで何よりも大事である。

(7) 薬品による中毒

① 皮膚に付着した場合

- i) 直ちに大量の水で洗う。
- ii) 濃硫酸のように水と反応して発熱するものは、はじめに乾いた紙や布で素早く拭き取った後、大量の水で一挙に流す。

② 目に入った場合

- i) まぶたを広げて流水で洗う。
- ii) 洗面器の水に顔をつけ、まばたきを繰り返すのもよい。

③ 飲み込んだ場合

- i) 一刻も早く吐かせる。
- ii) 喉の奥に指を突っ込んで吐かせる。
- iii) 胃が空だと吐きにくいので、大量の水又は牛乳を飲ませて吐かせる。(ただし強酸、強アルカリ腐食性物質を飲み込んだときは、胃に穴が開いたり、吐き出したものが気道に入る恐れがあるので、早急に医師の手当を受けること。)

④ 吸引した場合

- i) 被害者を直ちに新鮮な空気のところに移し、衣類を暖めて安静にする。
- ii) 場合によっては酸素吸入や人工呼吸を行う。
- iii) 呼吸はしているが意識がない場合は、横向きに寝かせ、吐き出したものにより窒息しないようにする。

(8) ガス中毒、酸素欠乏

- i) 発見者は、直ぐに部屋に飛び込まないで、ぬらしたタオルなどで口と鼻を覆い、すばやく行動する。

- ii) 窓やドアを開けて換気をはかる。
- iii) 事故者をすぐ風通しのよい場所に救出し、衣類を暖めて呼吸しやすくする。
- iv) ガス漏れの場合は、元栓を締めてガスの発生源を断つとともに、火気及び電気にも気をつけること。
- v) 病院、救急車に連絡する。
- vi) 意識があっても、動かしたりすると状態を悪化させるので注意すること。

(9) 感電

- i) 直ちに電源を切り、感電者を電流から解放するとともに、新鮮な空気のあるところに移し、衣類を暖めて身体全体を楽にさせる。
- ii) 救助者が感電しないように、乾いた棒や布、皮製手袋などを用いて電線や器具を引き離す。
- iii) 感電者が呼吸停止していたり、あるいは呼吸が浅いときは人工呼吸や心臓マッサージを施す。
- iv) 火傷、外傷のあるなしにかかわらず、早急に医師の手当を受けること。

(10) 溺水

- i) まず意識の有無、呼吸の有無を調べる。
 - ii) 呼吸がなければ、まず気道確保をして人工呼吸をする。(人工呼吸・心臓マッサージ参照)
 - iii) 人工呼吸を続けながら保温を十分にしておき、救急車を待つ。
- (注) 人工呼吸の途中で水を吐いたら、気管に入らぬように顔を横向けにして、窒息させないように注意すること。
- 胃の中に大量の水を飲み込んでいるため十分呼吸ができなければ、体を横向きにし、上腹部を軽く押さえて水を吐かせる。
- ぬれている衣類は、着替えるものがあれば取り替える。ないときは、脱がすとかえって寒いので、そのまま濡り気をよくふき取って毛布等で包む。

(11) 寒剤による凍傷

- i) 患部をぬるま湯(40℃くらい)の中に20～30分浸す。
- ii) 寒剤が皮膚に付着してはがれないときは、そのまま流水につけるか、温風をあてて自然にはがれるのを待つ。
- iii) 正常の温度に回復しても、患部を高くして露出したまま安静に保つ。
- iv) 温湯が用意できない場合、あるいは患部が耳などで、浸すことができない場合は、手や脇のような体の暖かい部分で暖めること。

2 人工呼吸・心臓マッサージ

(1) 人工呼吸

- i) まず事故者を仰向けにする。口の中に異物や吐物があればふきとる。頭をできるだけ後ろに曲げると気道が開く。そのためには、片手を額にあてて頭を後

ろに反らせる。他方の手で、事故者の下顎を強く引き上げる。

- ii) 口から吹き込む。
- iii) 事故者の鼻を片手で閉じる。
- iv) 事故者は自然に息を吐き出す。事故者の吐いた息を吸い込まないように、救助者は水泳の自由形の際の要領で、顔を横に向けて息を吸い込む。
- v) はじめの 10 回は、早めに強く吹き込む。
- vi) あとは脈拍があれば 5 秒間に 1 回の割合で吹き込む。
- vii) 事故者の口と鼻をハンカチでおおっても効果は変わらない。

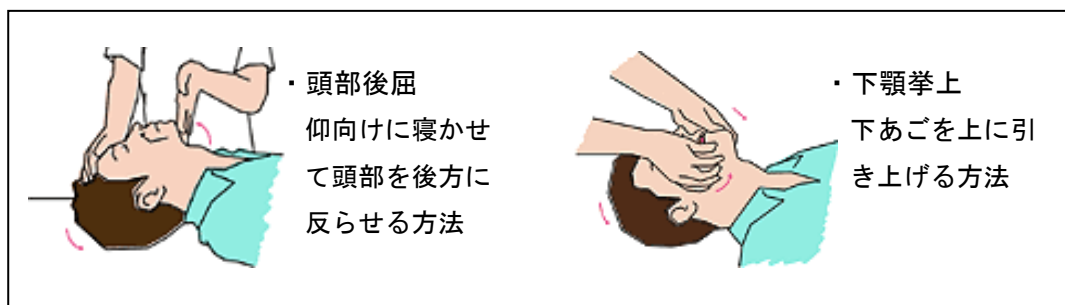
(2) 心臓マッサージ

急に意識がなくなり、呼吸停止、またはあえぐような呼吸になり、痙攣が起こった場合、脈拍が触れず、瞳孔が大きく開き、心臓の拍動停止が疑われたとき、直ちに行う。

3～4 分以内に開始すれば救命の可能性はある。

- i) まず事故者を床上か硬い板に移す。ベッドなら背の下に板を入れる。
- ii) 指が胸壁に触れないようにし、両手を重ねて事故者の胸骨下 1/3 のところにおく。
- iii) 肘は曲げず、伸ばした位置で垂直に体重をかけ、胸骨が 4～5cm 陥没するように圧迫する。
- iv) 1 秒間に 1 回の割合で続ける。0.5 秒圧迫し、0.5 秒力を抜く。

■ 気道確保の仕方仰向け



■ 人工呼吸の仕方

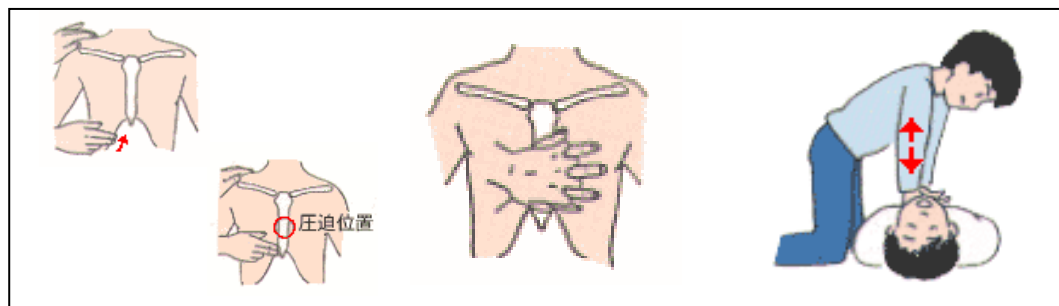
口うつしによる人工呼吸が有効ですが、技術的にタイミングが難しいので、消防隊員等の指導を十分に体得してから実施しましょう。



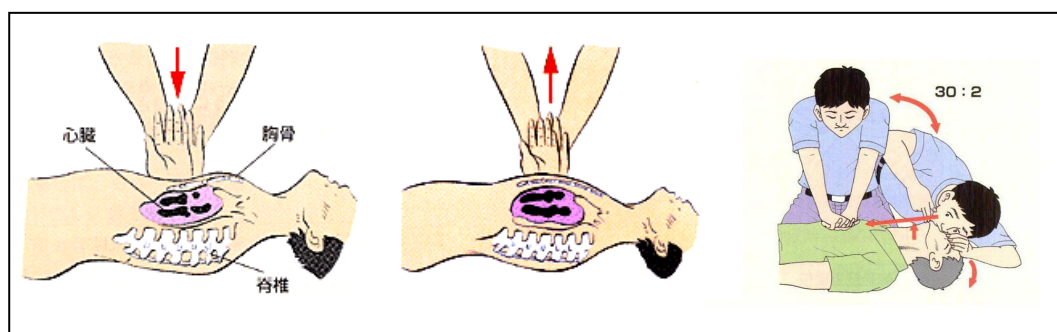
■ 心肺蘇生の仕方

呼吸が止まり、脈が触れなくなったときには、直ちに心肺蘇生を行います。

- ① 薬指で胸骨下部の凹部を探し、中指と人差し指をそろえて置く。
- ② もう一方の手の付け根を人差し指に接して、胸骨下半分のところに当てる。
- ③ 他方の手をその手の上に重ね、肘を真っ直ぐに伸ばし、胸を 3.5～5cm 圧迫する。



- ④ 1 分間に 100 回のスピードで 30 回圧迫する。
- ⑤ 気道を確認し、人工呼吸を 2 回行う。
- ⑥ 30 回の心臓マッサージと 2 回の人工呼吸を繰り返す。(一人で行う場合)



■ A E D（自動体外式除細動器）の使用方法及び設置場所

自動体外式除細動器（A E D）とは、電気ショックが必要な心臓の状態を判断できる心臓電気ショックの器械である。

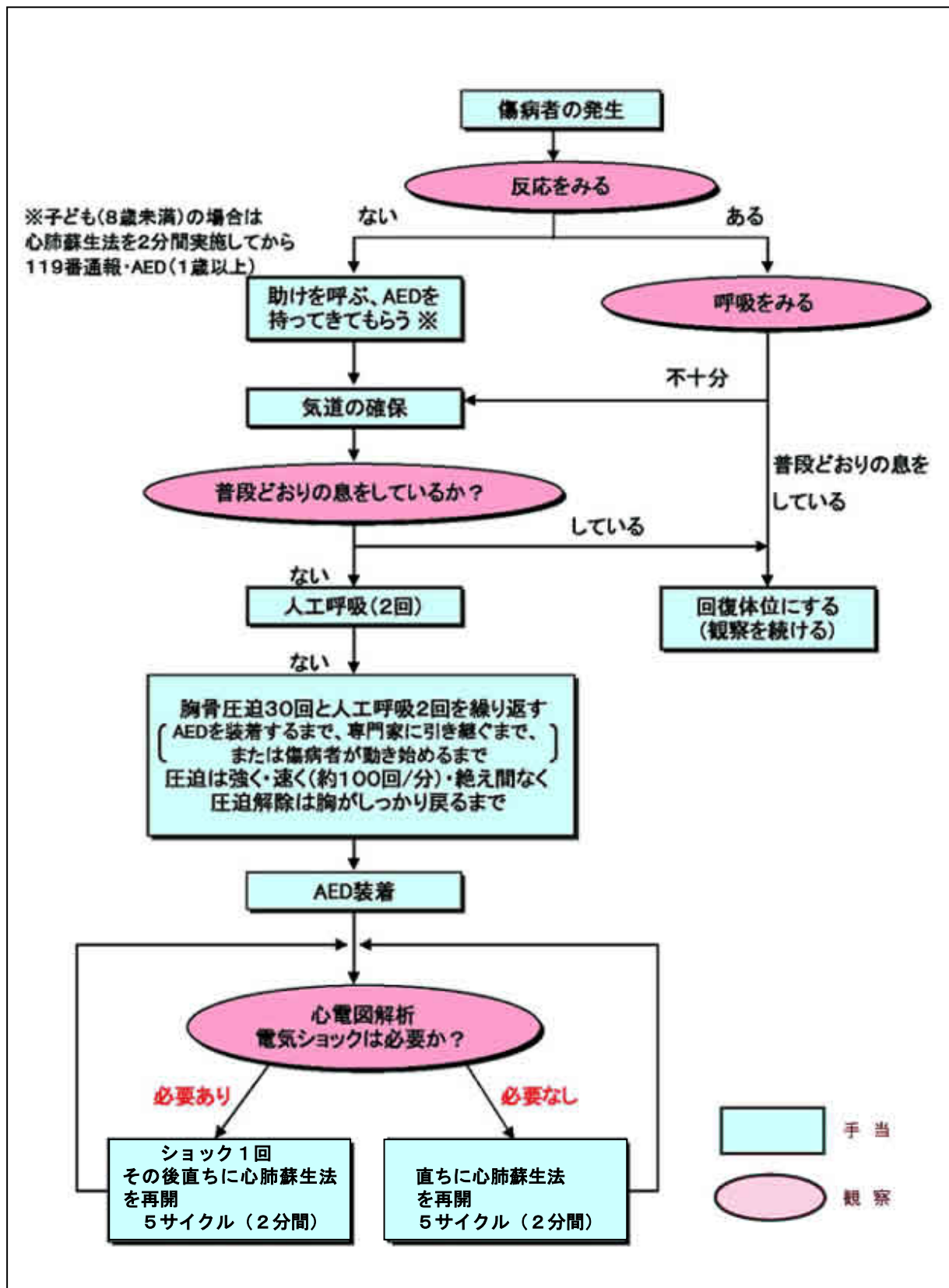
突然死の死因のほとんどは心臓疾患です。それを心臓突然死といい、その大部分は心室細動という病気である。

心室細動になると心臓がけいれんし、ポンプとしての役割が果たせず、助かるチャンスは 1 分経過するごとに約 10% ずつ失われ、10 分後にはほとんどの人が死に至る。この心室細動を正常な状態に戻す唯一の方法は除細動（心臓への電気ショック）である。

そこで、早期の除細動ができる A E D の使用が必要となり、素早い除細動は社会復帰の鍵にもなる。A E D を自宅、学校、職場、たくさんの人が集まる公共の施設など様々な場所に置き、A E D を使うことで、突然死を防ぐことができる。

AEDは、除細動が必要かを判断し、救命の手順を音声にて指示する。AEDは除細動を含めた救命行為が簡単に出来るように作られているが、使用に際しては、機会を捉えて、繰り返し講習会に参加することが望ましい。

AEDを用いた心肺蘇生法の流れ



《AEDの使用方法》

AEDは、突然心停止を起こし、次の兆候が認められる患者に対し使用する。

(1) 反応がない (2) 呼吸が停止している。

注1) 患者が8歳未満または体重25kg未満の場合は、使用しないこと。

注2) 水は厳禁です。雨が降っている場合は、屋根のある所に移動すること。

注3) 金属製のアクセサリ等は、外すこと。

注4) ペースメーカーが埋め込まれている場合は、3cmぐらい離れたところに電極パッドを貼ること。

(1) 電源を入れる。



電源スイッチを押します。

機種によっては、自動的に電源が入るものもあります。

(2) 音声ガイダンスに従い、電極パッドを取り出して患者に貼り付ける。

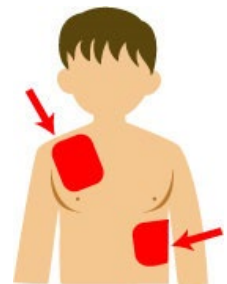


貼り付ける位置は、右前胸部と左側胸部下です。

詳しい位置は、電極パッドが入っていた袋に表示されています。

電極パッドと皮膚の間に隙間があると火傷をする危険があるので、しっかり密着させることが大切です。

パッド貼り付け位置



(3) パッドが正しく装着されると、自動的に心電図の解析が始まります。

注) この間は携帯電話を使用しないこと。

(4) 通電ボタンを押す。



電気ショックが必要な場合は、通電ボタンが赤く点滅するので、音声に従い通電ボタンを押す。

除細動の成功、失敗に関わらず、ただちに心臓マッサージ30回、人工呼吸2回の心肺蘇生を始める。

心肺蘇生開始から2分経過すると、AEDが自動的に心電図解析を開始します。

注) 救急隊員や医師に引き継ぐまでは、電極パッドはつけたままにしておく。

注) AEDの電源も切らないようにする。

3 けが人の運び方

- (1) けがの状態をよく見て、傷、火傷、骨折、意識障害、呼吸停止などに対する応急処置をした後で、運ぶようにする。
- (2) 担架や毛布で運ぶときの一般的な注意事項は、
 - ① 傷のあるときは、なるべくその部を高くし、動かさないようにして運ぶ。
 - ② 意識障害のある場合は、頭部を動かさない、あわててゆすったりしない、気道の確保をする。吐いた物による窒息を防ぐため、吐き気のある患者は横向き又は、うつ伏せにする、などに注意して運搬すること。
 - ③ 普通は、進行方向に病人の足を向け、目の方向が前進方向にあるようにする。
 - ④ 坂道・階段の場合には、坂道や階段の上の方に頭部がいくようにし、なるべく水平に保つ、などである。
- (3) 抱いたり、背負ったりする運搬法もある。
- (4) 人数が多い程、安定した状態で運ぶことができる。可能なら、担架や戸板に乗せて運ぶ。
- (5) 担架がなければ戸板に乗せて運ぶ。最も運びやすく、安全性が高い。

九州共立大学防災の心得

1 日常の心得

建物・火気使用設備・危険物収納施設などが地震時に受ける倒壊等の被害を最小限にするため、担当者を決めて定期的に点検等を実施する。

- ◎ 建物の柱、壁などの老朽化や変形、損傷、亀裂などを定期的に点検する。
- ◎ 照明器具、窓ガラスなどを点検し、落下防止措置や飛散防止措置を実施する。
- ◎ 火気使用設備などの本体、燃料容器などは転倒しないか、周囲に転倒、落下するものがないか点検する。
- ◎ ガスコンロ、湯沸器、灰皿などの周囲には、燃えやすい物を置かない。
- ◎ 火災が発生した時にあわてないように消火器及び屋内消火栓の位置、使用方法を確認する。
- ◎ 常に危機感を持ち、自分の現在位置から2ヶ所以上の避難経路、又避難場所を確認しておく。
- ◎ 執務室、研究室、実験室などの什器類には、転倒防止や移動防止の措置をとる。
- ◎ キャビネット、書架及び本棚などの上部には、重い物を置かない。
- ◎ 廊下、階段、出入口付近、防火扉の前にダンボール箱、ロッカーなどの物品を置かない。
- ◎ 退校の際は、湯沸器、ガスコンロの元栓、たばこの吸殻などの火元を点検する。
- ◎ 非常時の持ち出し品については、事前に確認する。
- ◎ 漏電火災を防ぐため、必要の無い電気器具のコンセントを抜いておく。

2 地震発生

地震で最も恐ろしいのは二次的に発生する火災であり、地震の被害を最小限に抑えるためには、身の安全を確保し、素早く火の始末をすることです。

**** 命を守るポイント ****

① まず身の安全を確保

テーブルや机の下に隠れ、落下物から身を守る。手近に頭を守る物がない場合は、両手をしっかり組み、位置は頭から少し離す。

② 慌てて屋外に飛び出さない

「落ち着け！」と声を掛け合い、その場に留まる。とっさに屋外に出るのは大変危険。外に出る場合は、揺れが収まった後、ガラス破片など頭上の落下物に十分注意する。

③ すばやく火の始末

「火を消せ！」と声を掛け合い、火元を切る。タイミングを間違えと思わぬケガをするので、揺れの大きさを判断し落ち着いて火の始末をする。

④ 扉や窓を開けて脱出口の確保

揺れが激しいと、その場にうずくまるのが精一杯。揺れの合間をみて、ドアや窓を開け、逃げ口を確保する。

⑤ 家具から離れる

特に観音開きの書棚、食器棚などは、中の物が飛び出すので大変危険。本棚の下敷きになって大ケガや、身動きがとれなくなり避難できなくなる恐れがあるので注意する。

⑥ 室内のガラスの破片に注意

地震後、最も多いケガはガラスの破片などによる切り傷である。

⑦ 火が出たら消火

火災が起きたら「火事だ！火事だ！」と大声で近隣に知らせるとともに、最寄りの火災報知ベルを鳴らし、学生・教職員同士が協力して消火にあたる。

⑧ 協力しあって応急救護

ケガ人が出た場合には、すぐに助けを呼び、協力し合ってできる範囲の応急救護を行う。

⑨ 隣り近所と声をかけあって

普段から学生・教職員同士の協力体制を作っておく。

⑩ 正しい情報を聞こう

学内放送や、ラジオ、テレビから正しい情報を聞き、デマやパニックに陥ることのないように注意する。

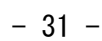
⑪ 緊急避難用具の備え

ラジオ、懐中電灯、飲料水、食料などの緊急避難用具を手近に備える。

3 火災発生

火災が発生した場合は、落ち着いて速やかに初期消火を行うことが大切です。

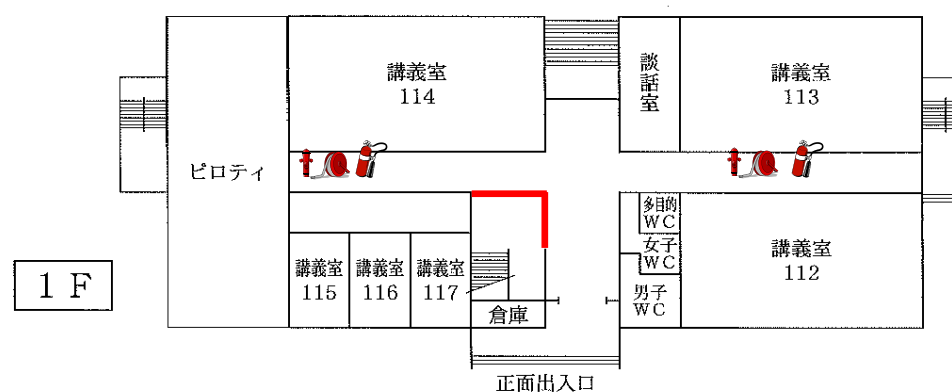
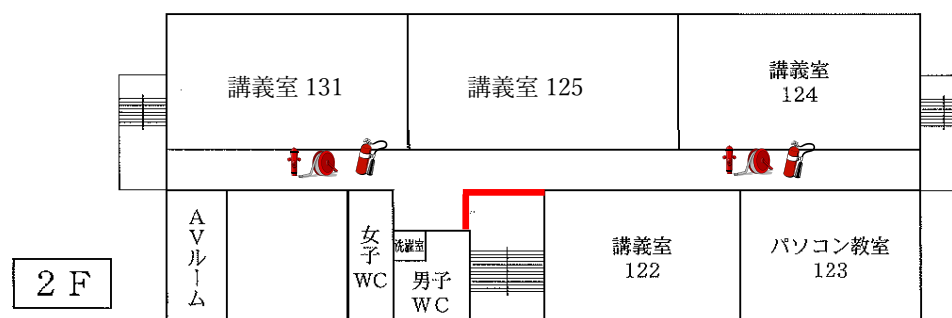
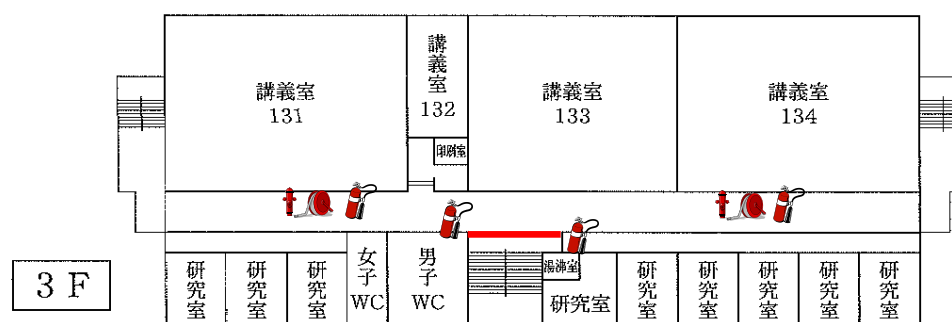
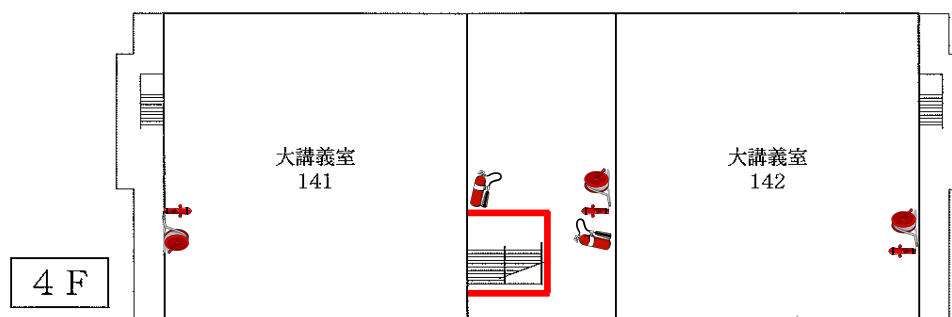
- ◎ 火や煙を発見したら、近くの者は駆けつけて燃えている個所を確かめる。
- ◎ 火災を確認したら、「火事だ！」と大声で周囲に知らせ、最寄りの火災報知ベルを鳴らす。
- ◎ できるだけ多くの人で消火器や屋内消火栓等を集めて、一気に消火する。
- ◎ 同時に2箇所以上から出火した場合は、人命に影響を及ぼす場所の消火を優先する。
- ◎ 学内放送を聞き、その指示に従って直ちに最寄りの避難場所に避難する。
- ◎ 避難の際、エレベーターは絶対に使用しない。



-  : 消火器
-  : 消火栓
-  : 防火扉

-  : 誘導灯
-  : 連結送水管
-  : 避難器具
-  : 火災報知器

学思館の消火設備



 : 消火器

 : 消火栓

 : 防火扉

 : ハロゲン化物消火設備

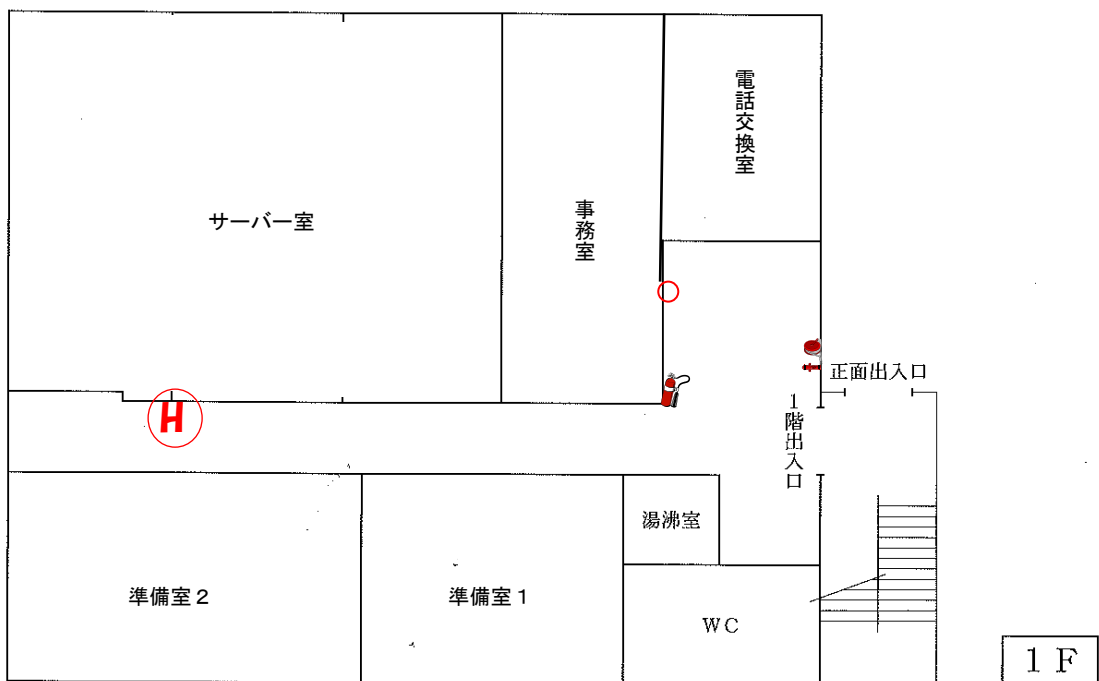
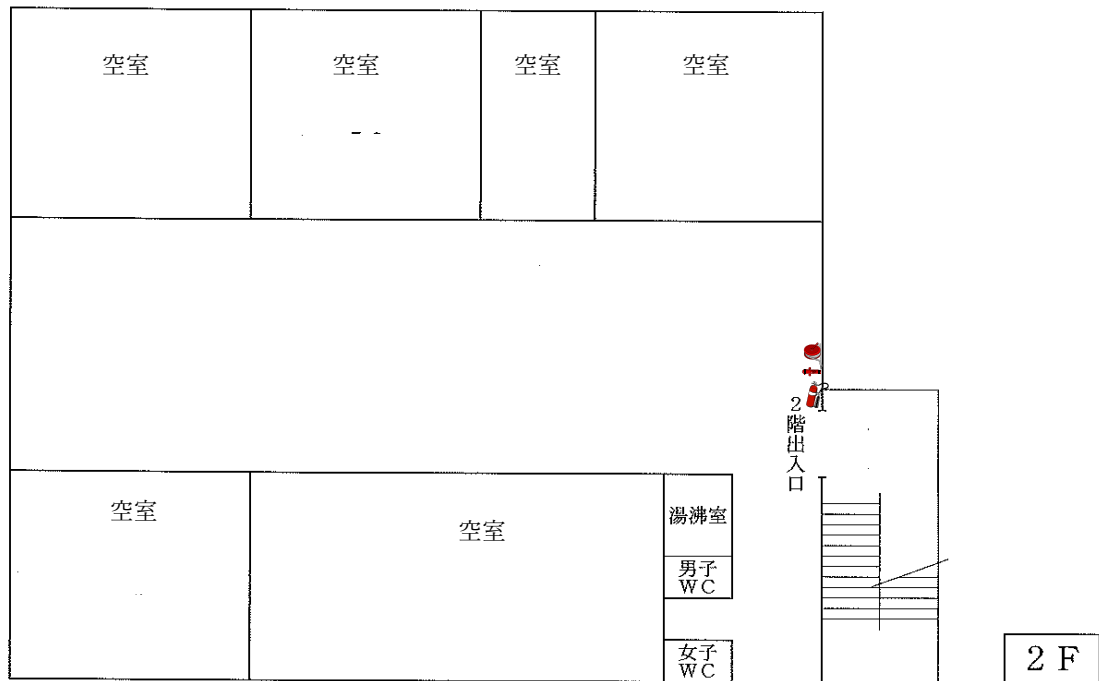
学術情報センターの消火設備

 : 誘導灯

 : 連結送水管

 : 避難器具

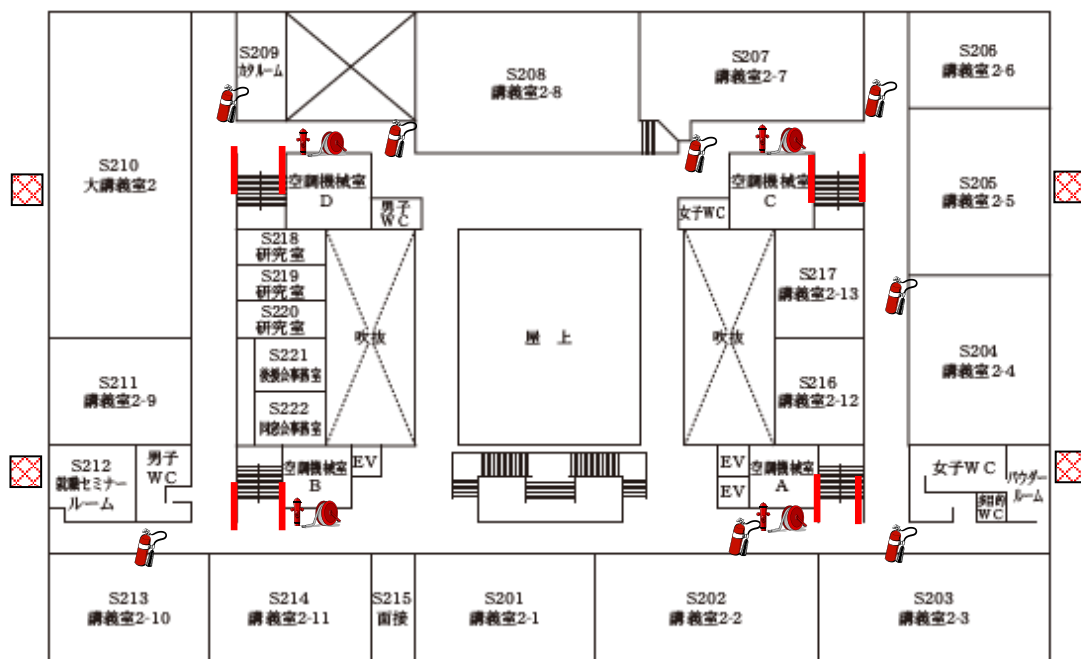
 : 火災報知器



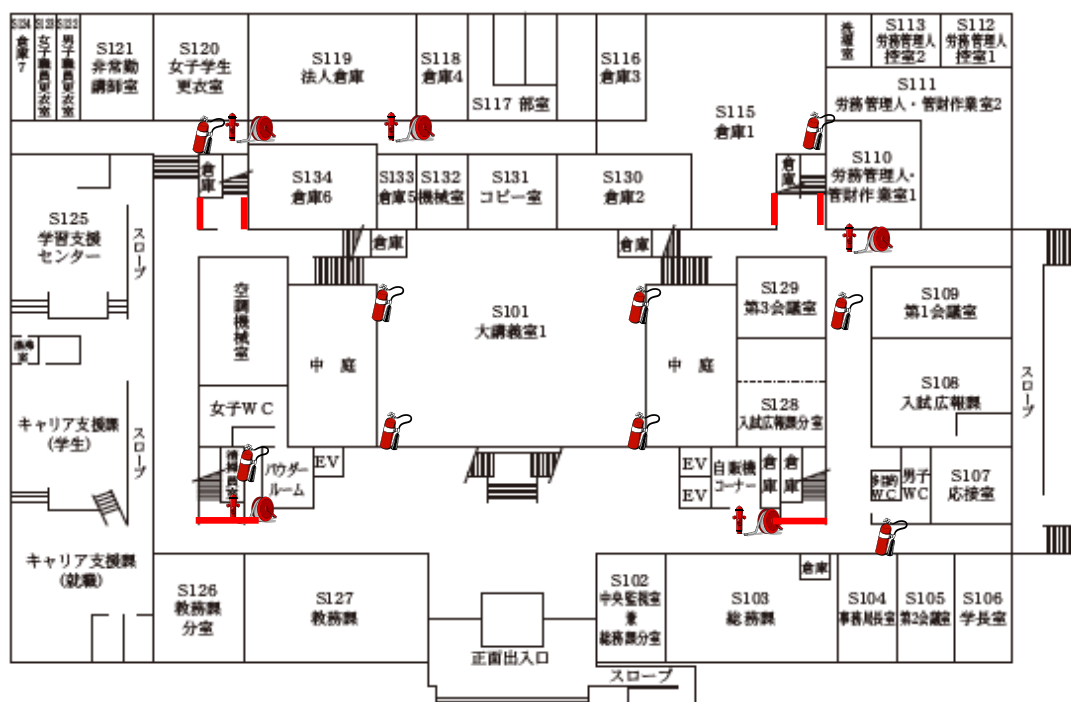
 : 消火器
 : 消火栓
 : 防火扉

深耕館の消火設備

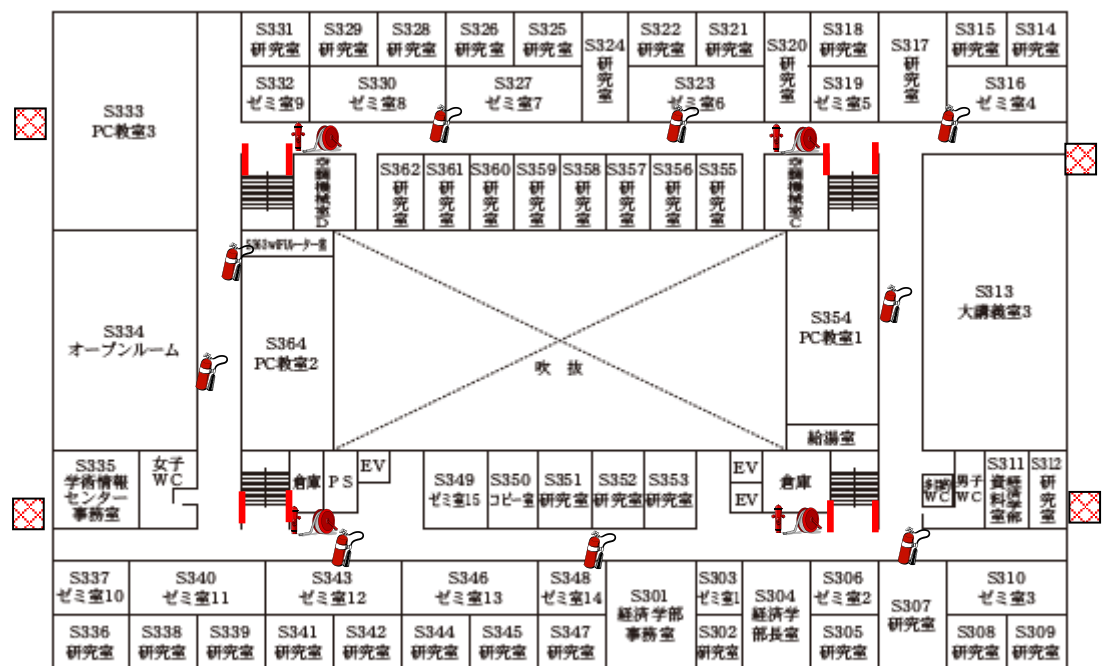
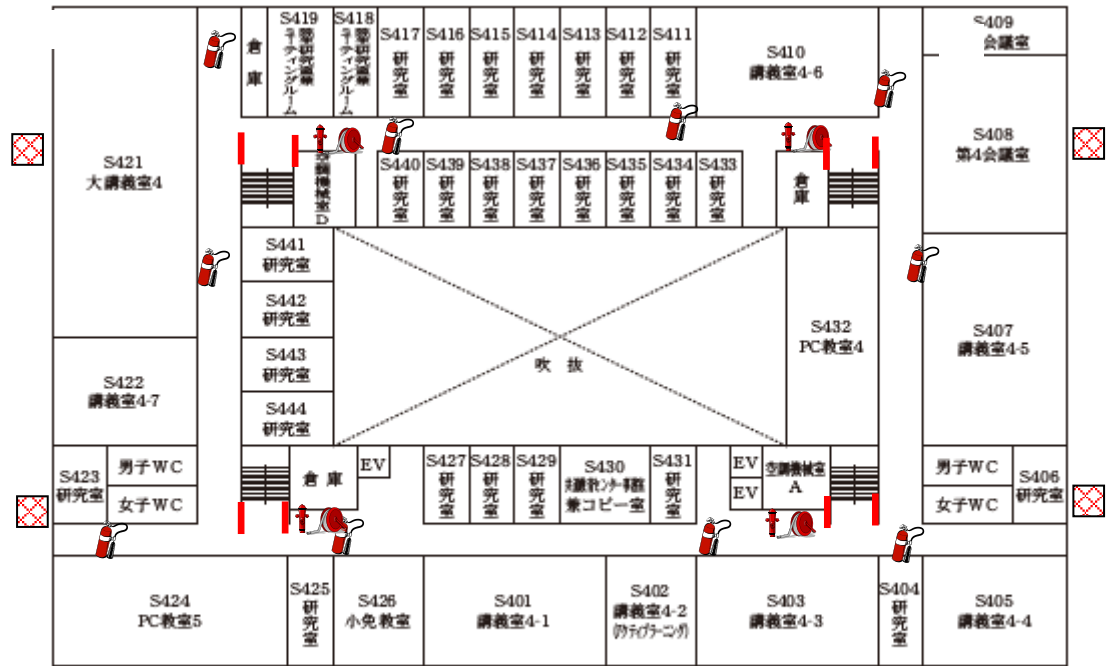
 : 誘導灯
 : 連結送水管
 : 避難器具
 : 火災報知器

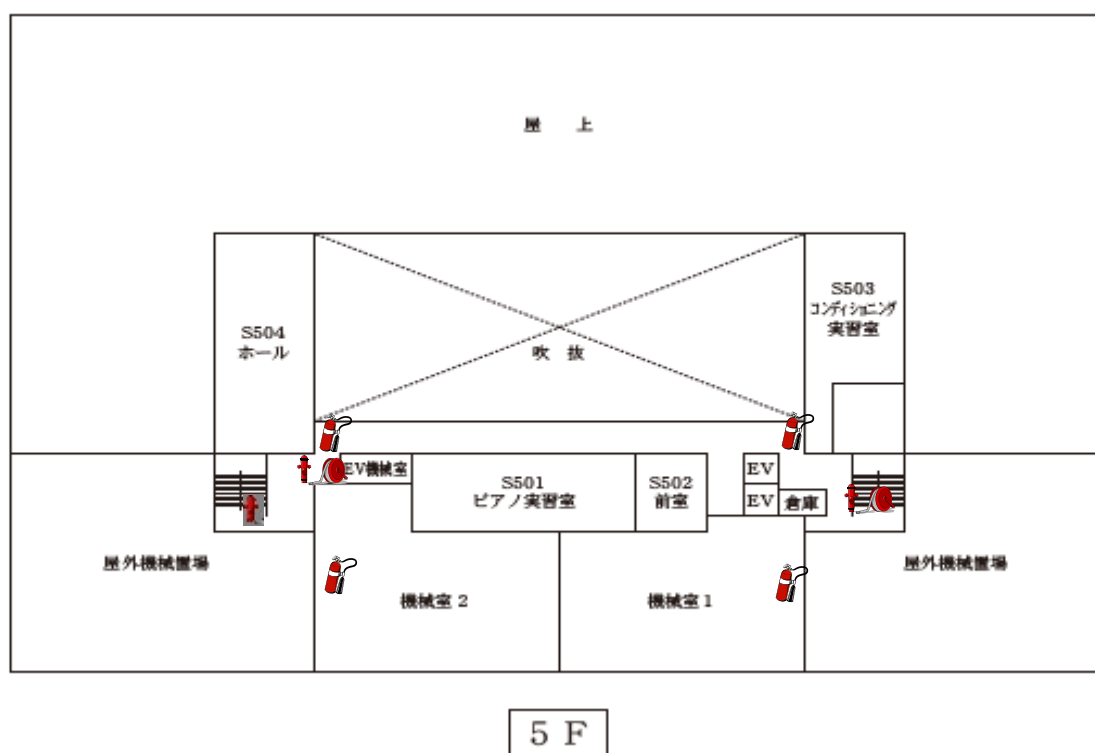
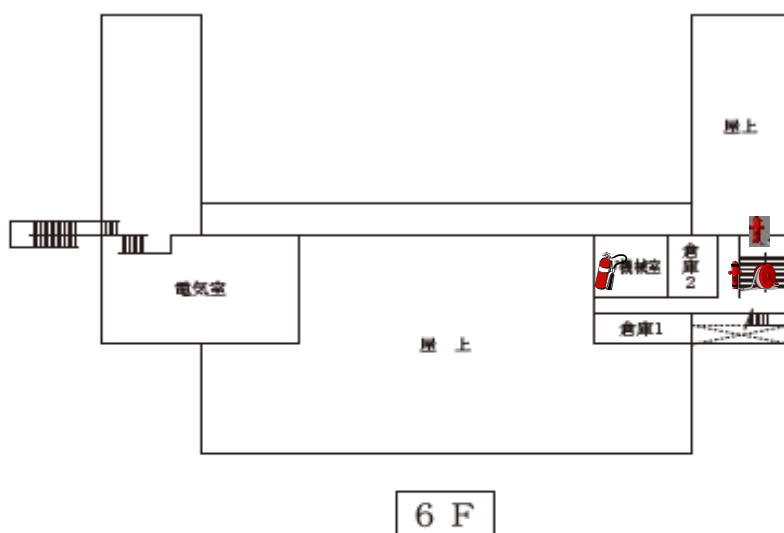


2 F



1 F

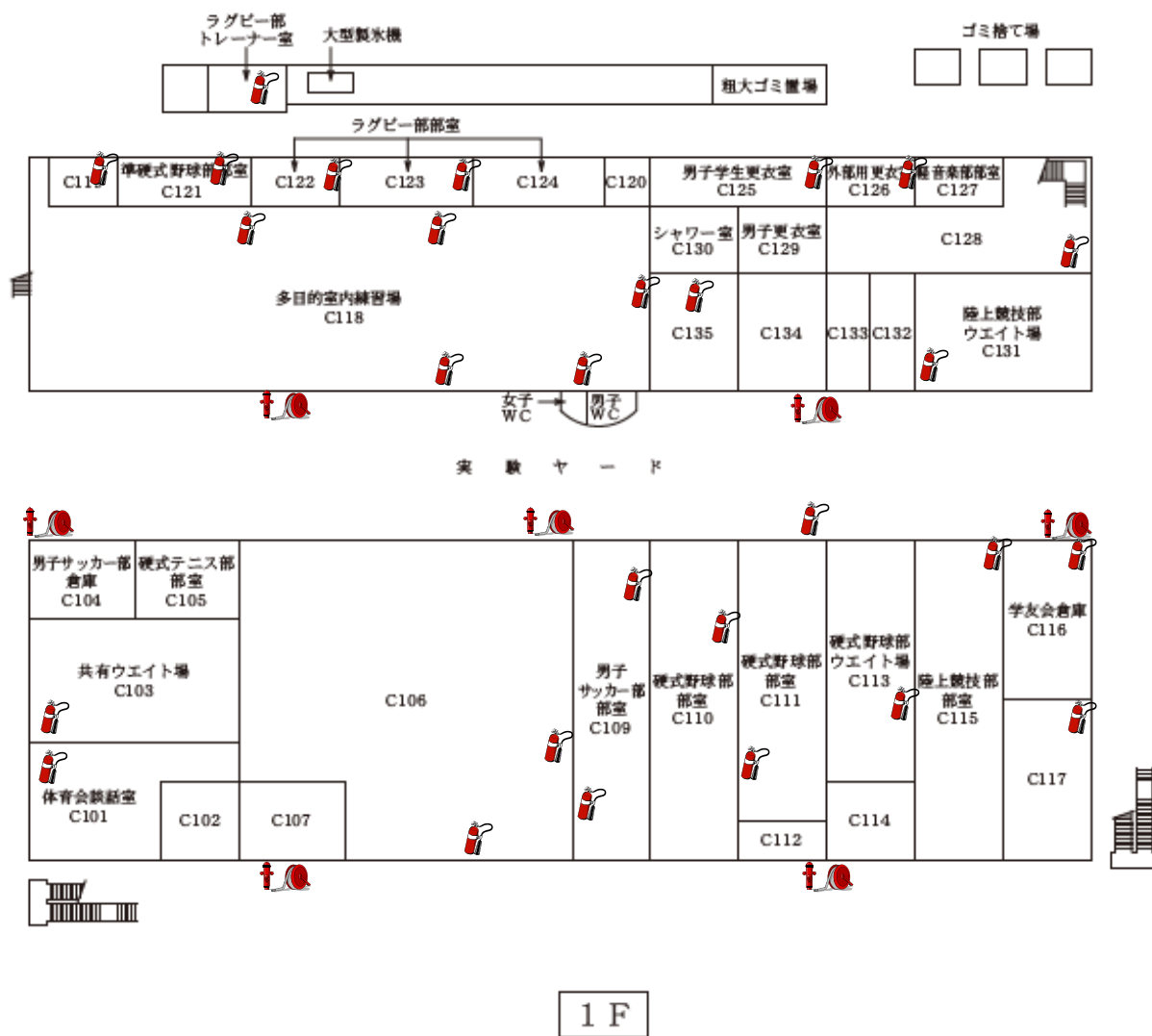




 : 消火器
 : 消火栓
 : 防火扉

部室棟の消火設備

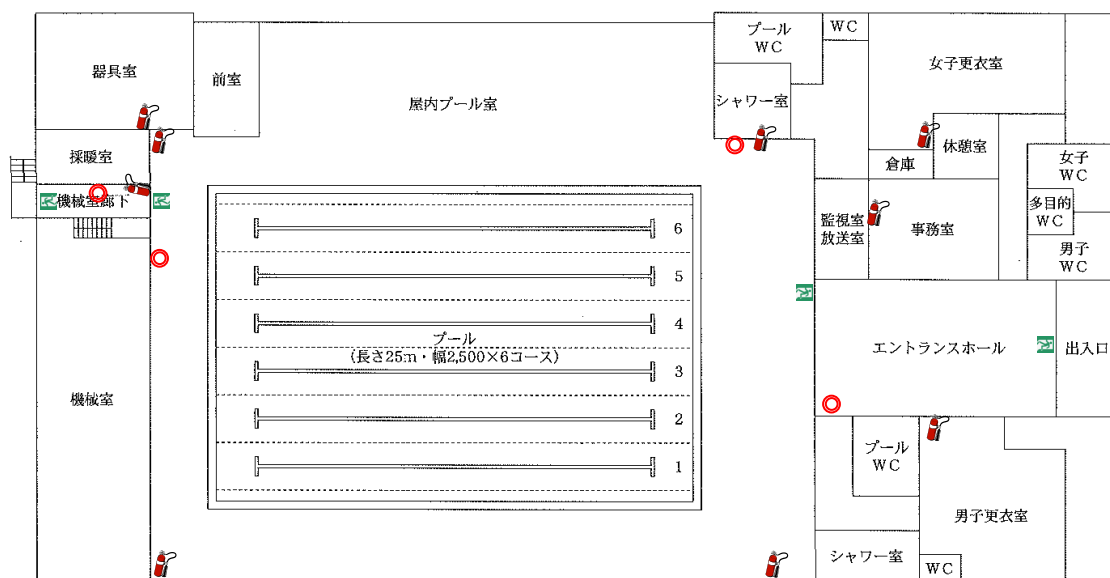
 : 誘導灯
 : 連結送水管
 : 避難器具
 : 火災報知器



-  : 消火器
-  : 消火栓
-  : 防火扉

プール棟の消火設備

-  : 誘導灯
-  : 連結送水管
-  : 避難器具
-  : 火災報知器



 : 消火器

 : 消火栓

 : 防火扉

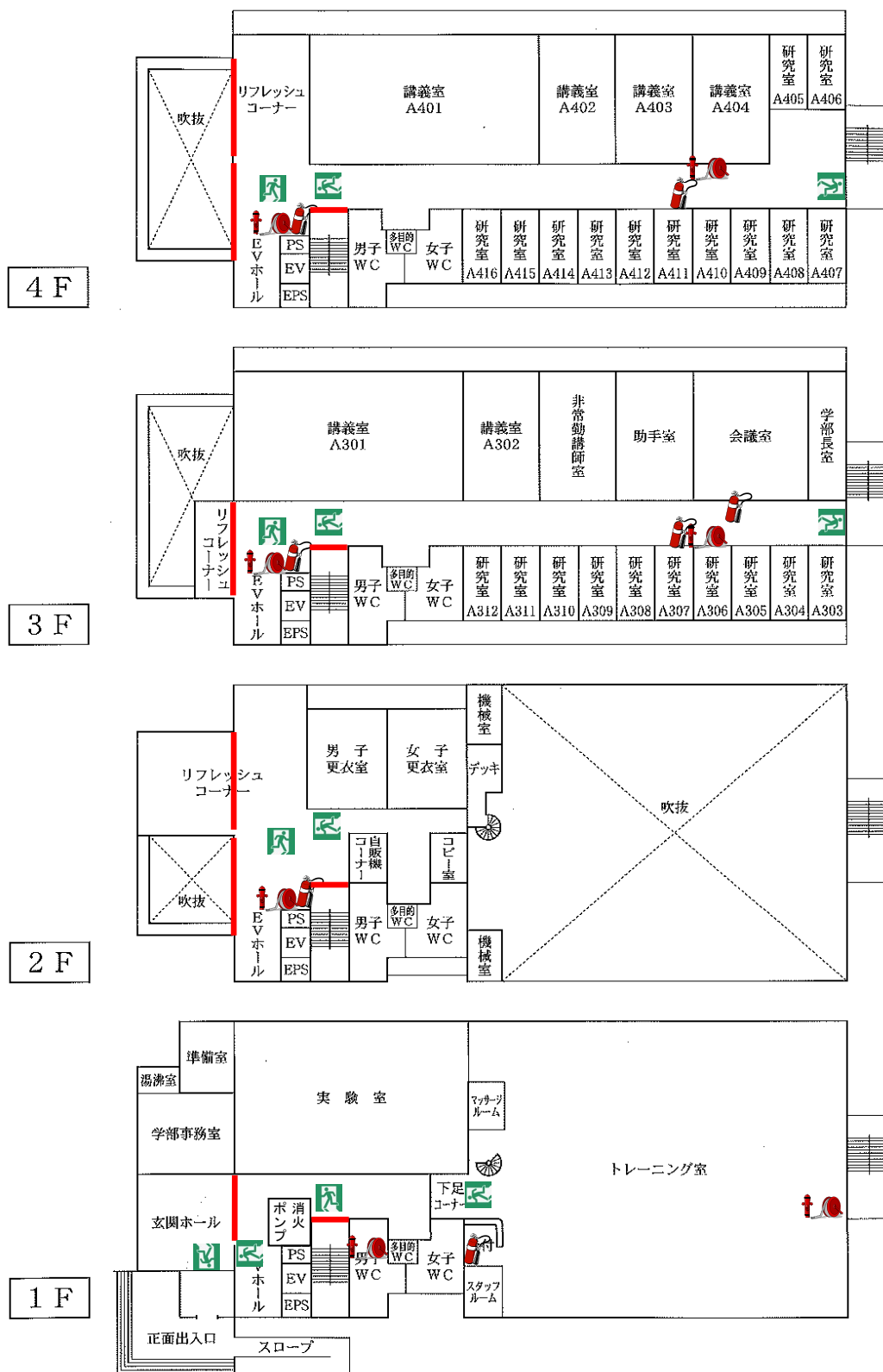
 : 誘導灯

 : 連結送水管

 : 避難器具

 : 火災報知器

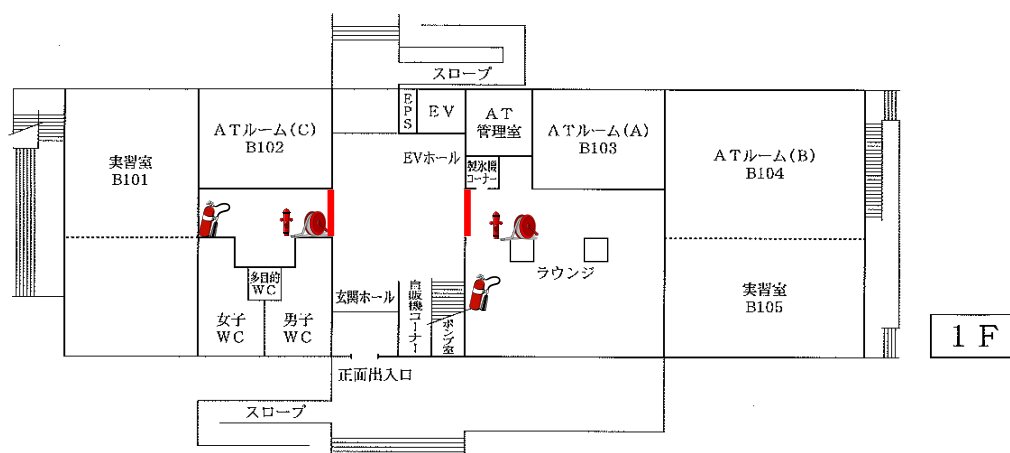
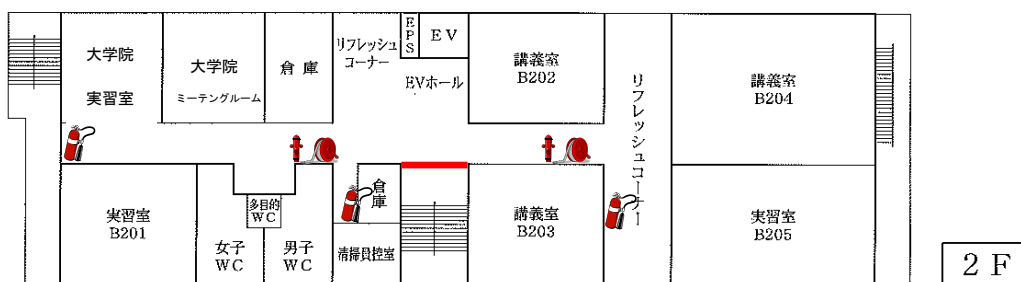
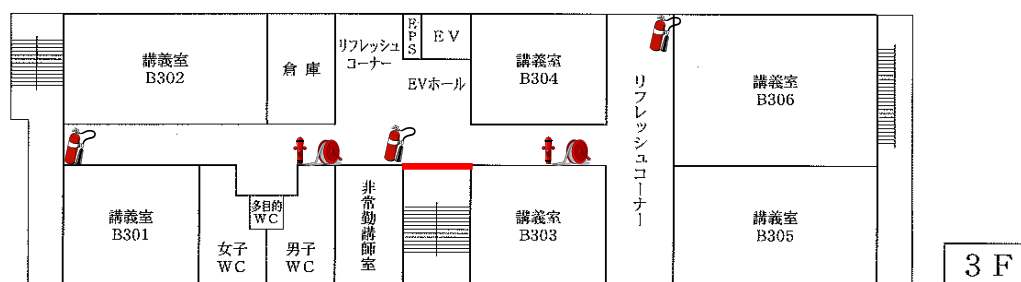
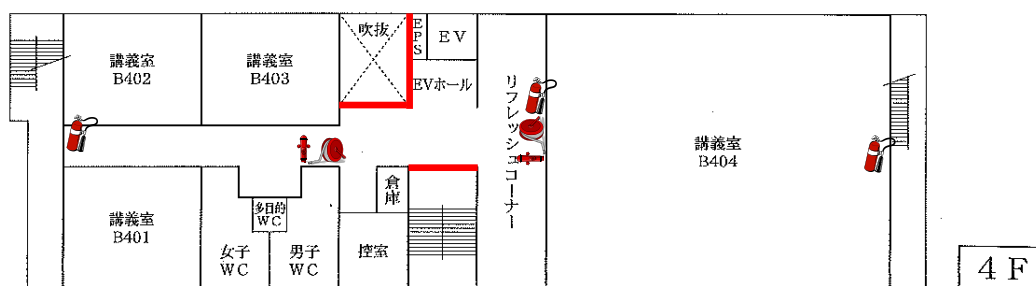
A 館の消火設備



-  : 消火器
-  : 消火栓
-  : 防火扉

B 館の消火設備

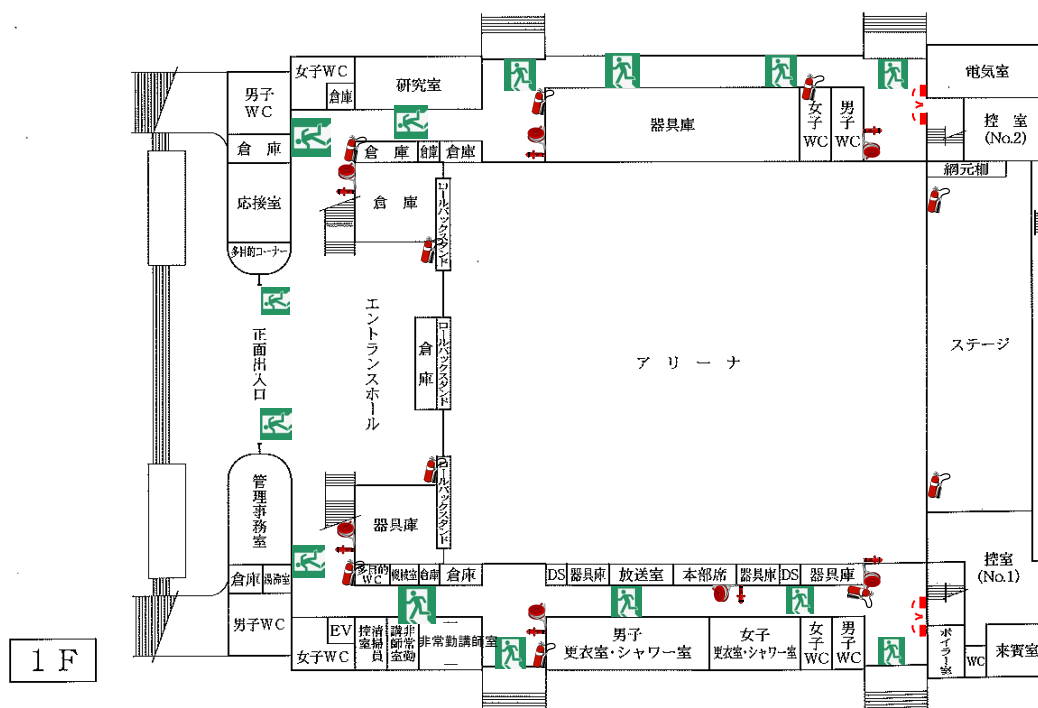
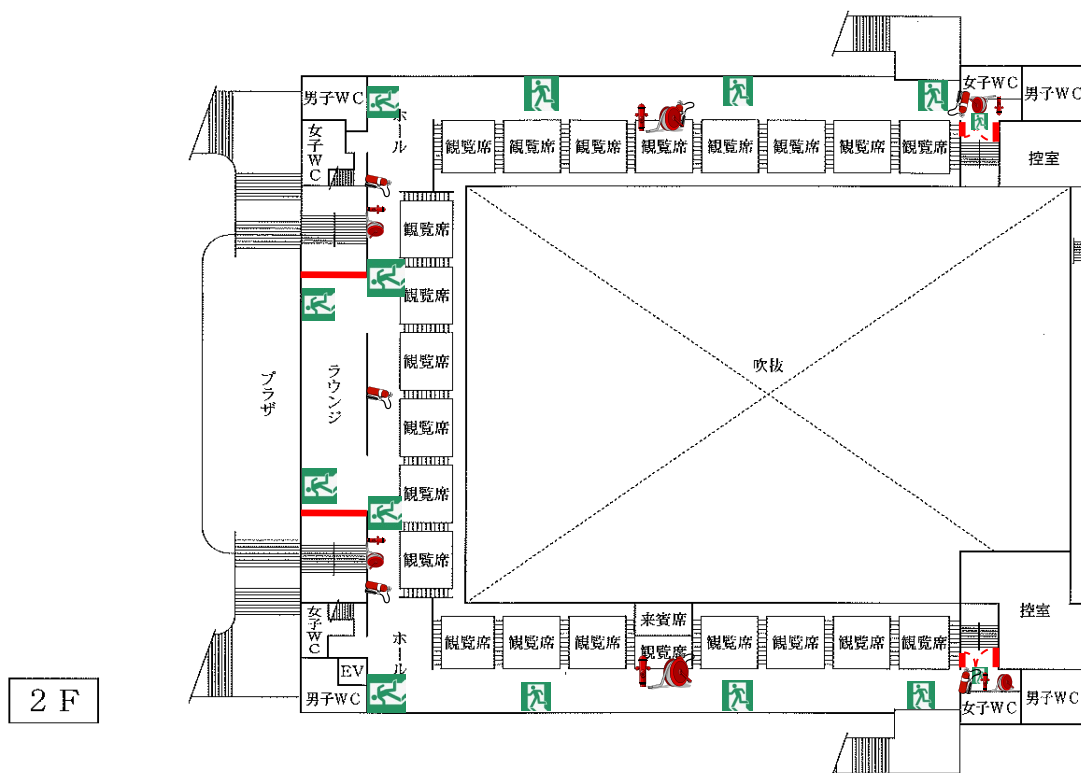
-  : 誘導灯
-  : 連結送水管
-  : 避難器具
-  : 火災報知器

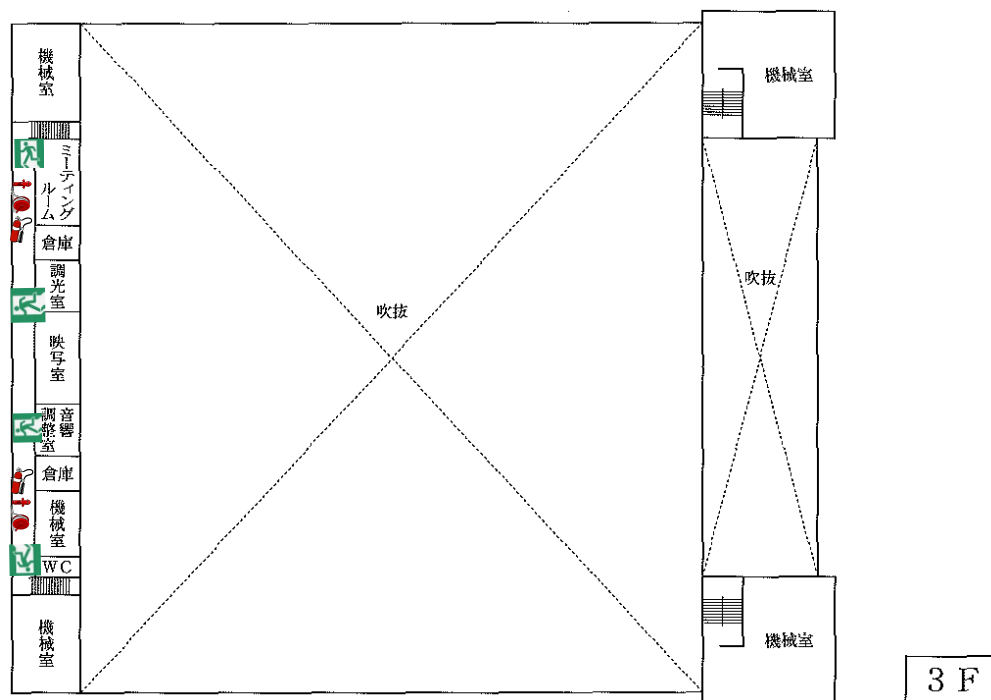


 : 消火器
 : 消火栓
 : 防火扉

記念館の消火設備

 : 誘導灯
 : 連結送水管
 : 避難器具
 : 火災報知器

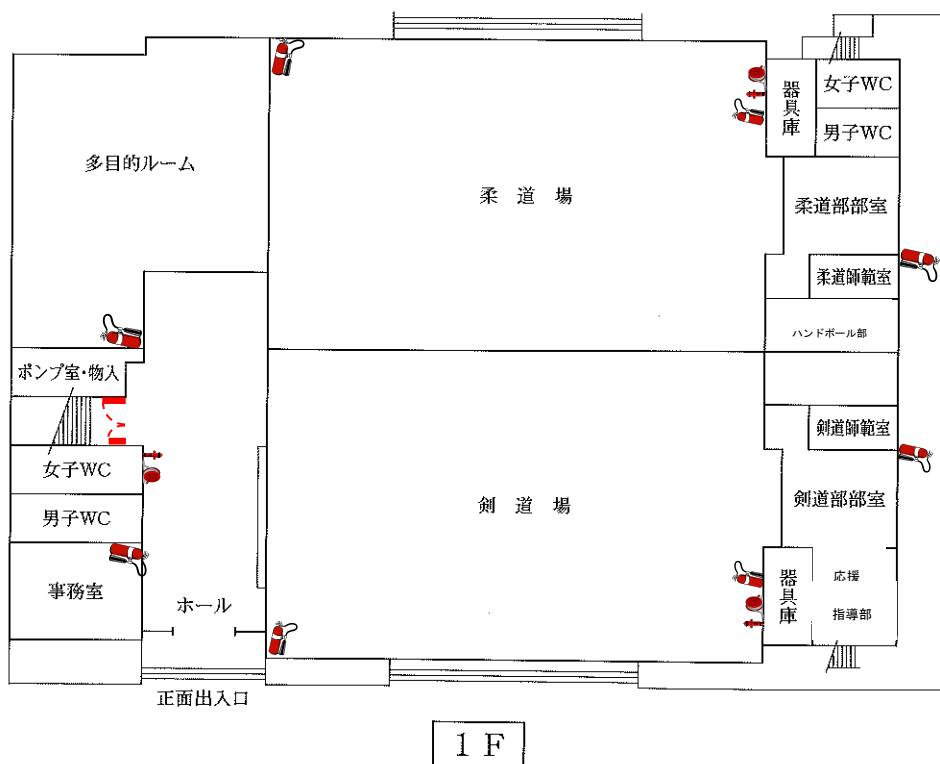
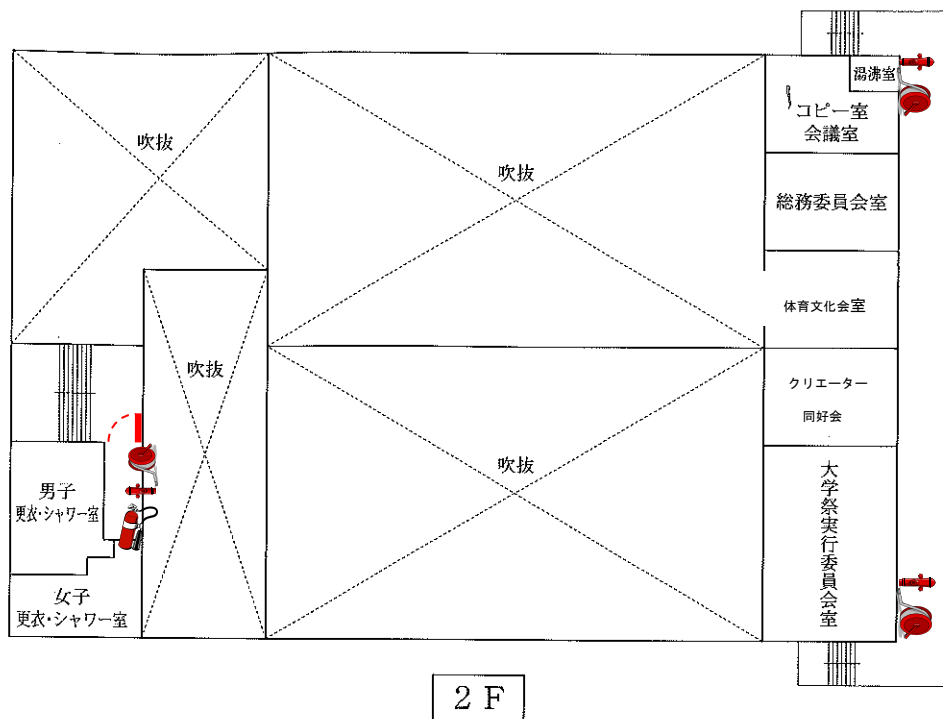


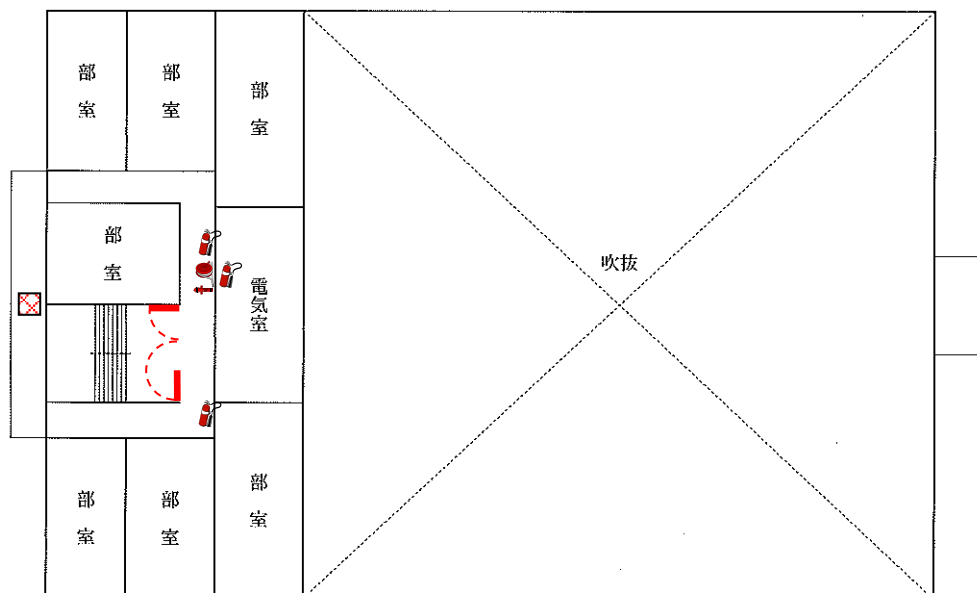


 : 消火器
 : 消火栓
 : 防火扉

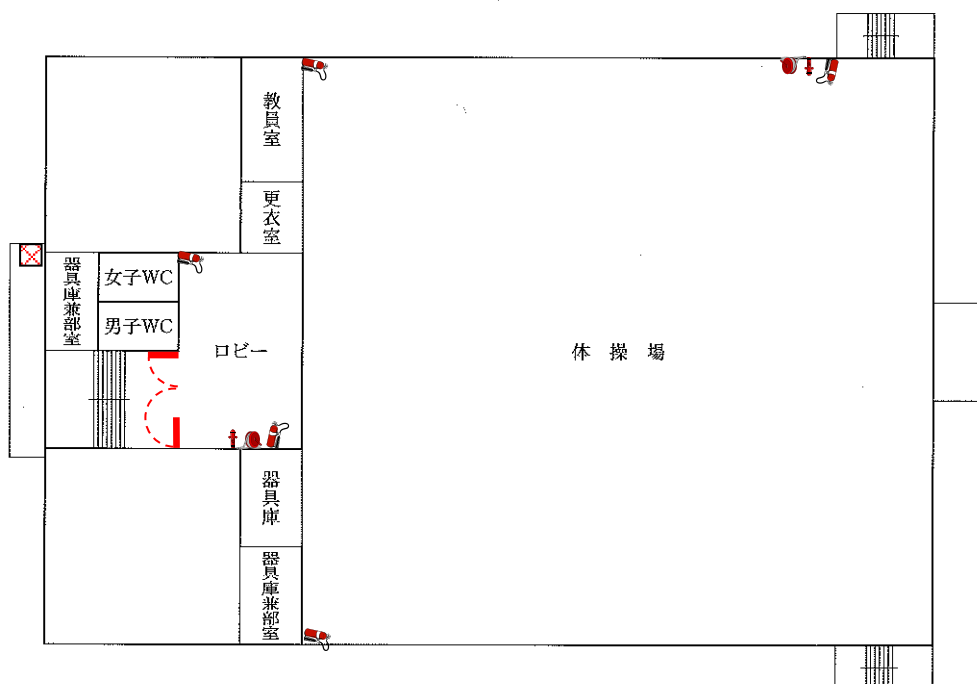
耕技館の消火設備

 : 誘導灯
 : 連結送水管
 : 避難器具
 : 火災報知器





4 F

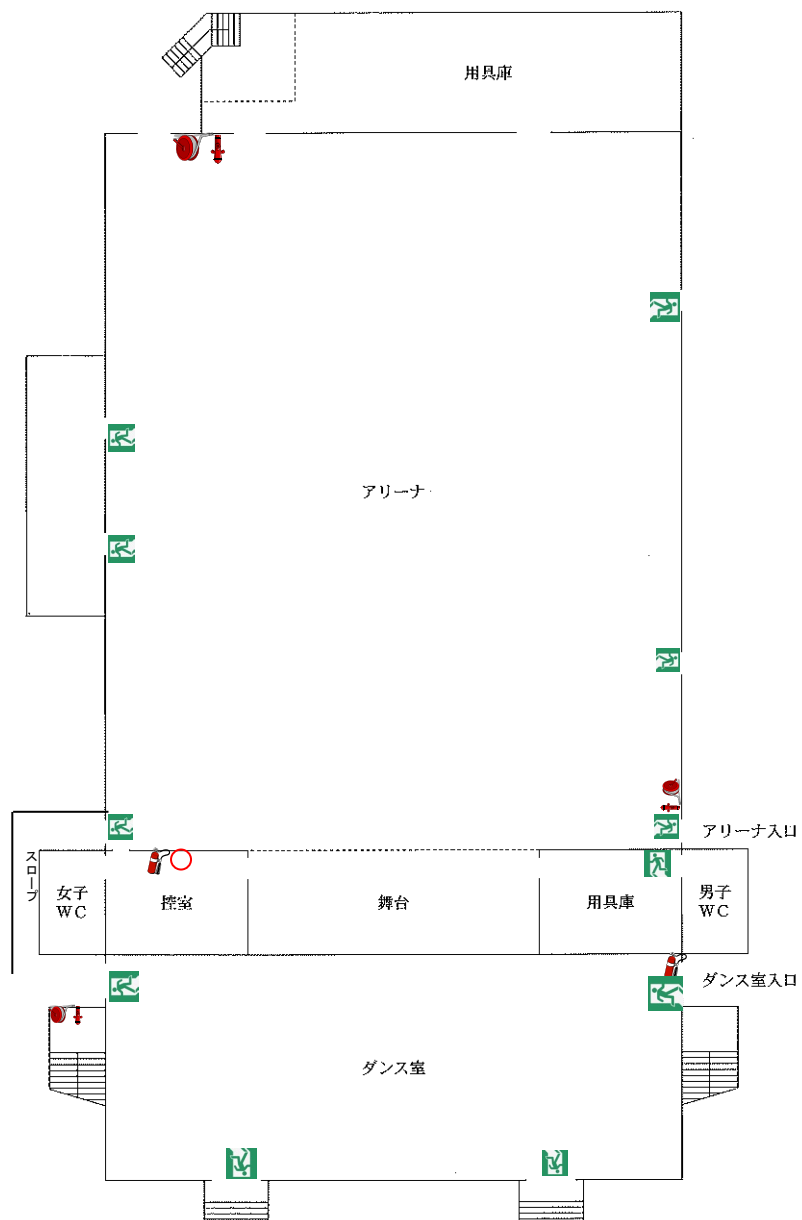


3 F

-  : 消火器
-  : 消火栓
-  : 防火扉

第二体育館の消火設備

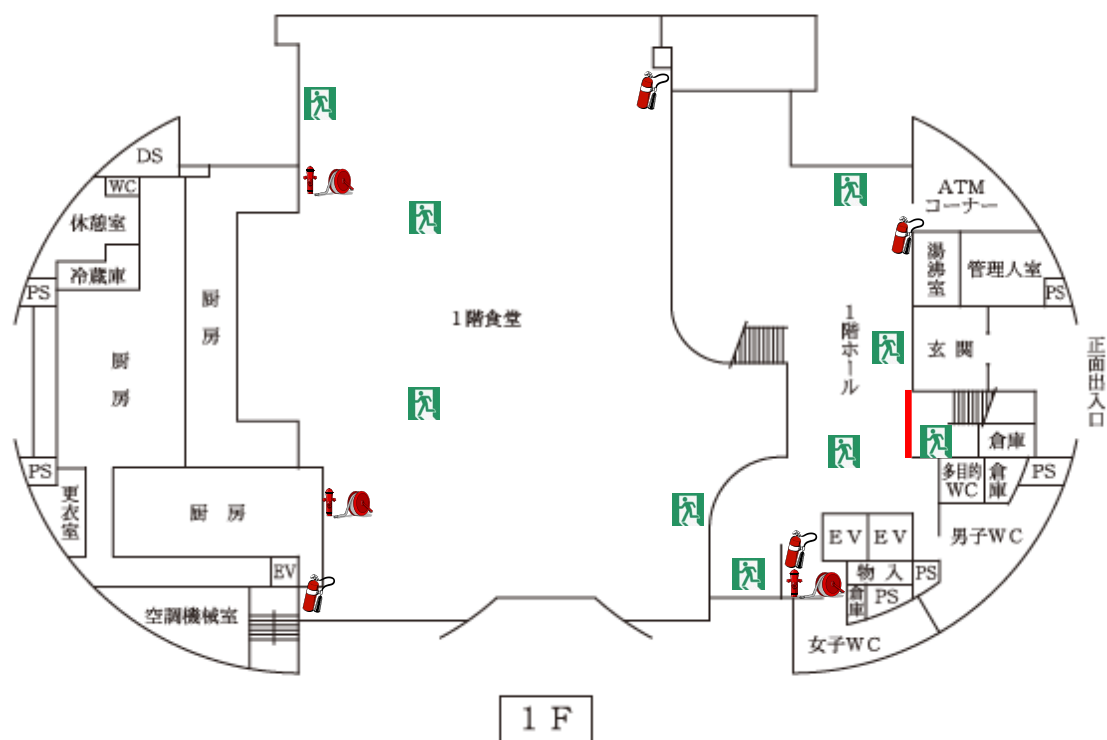
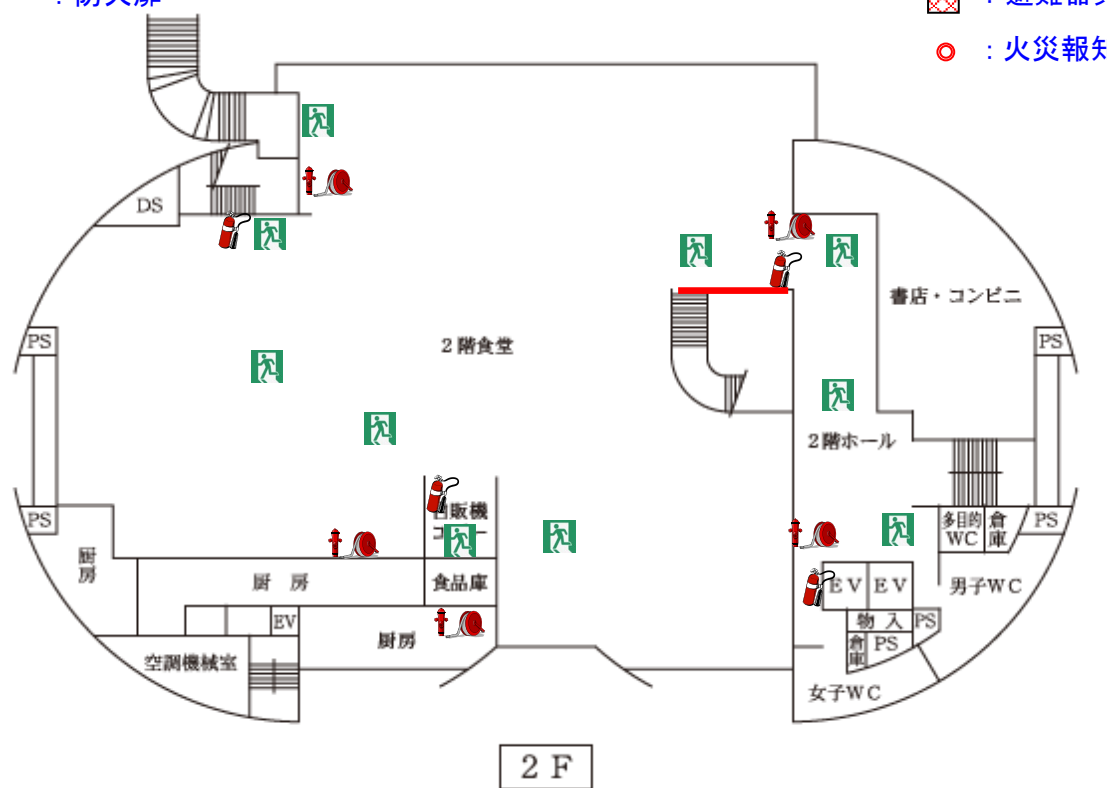
-  : 誘導灯
-  : 連結送水管
-  : 避難器具
-  : 火災報知器

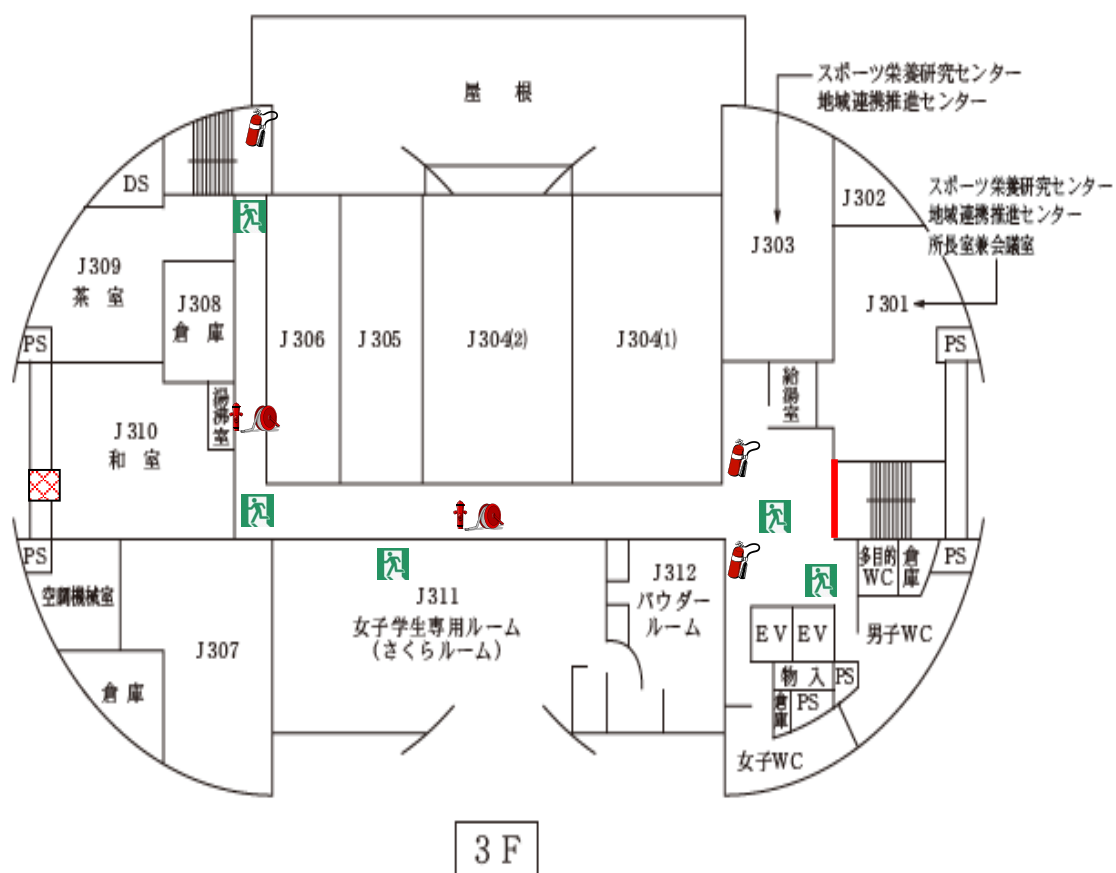
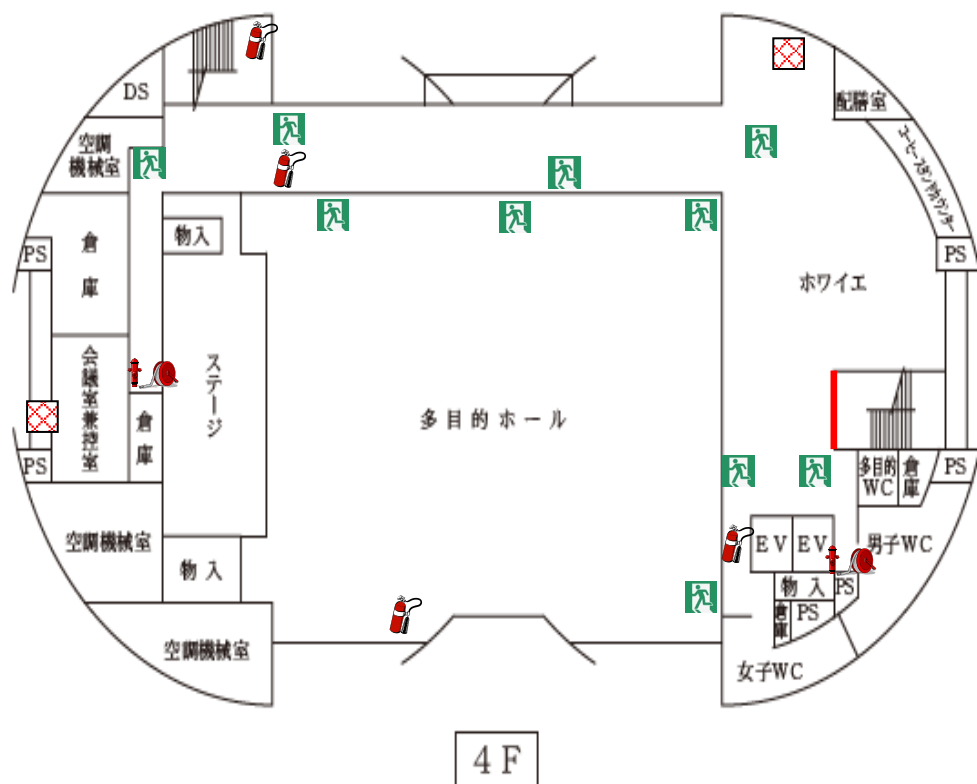


-  : 消火器
-  : 消火栓
-  : 防火扉

自由ヶ丘会館の消火設備

-  : 誘導灯
-  : 連結送水管
-  : 避難器具
-  : 火災報知器

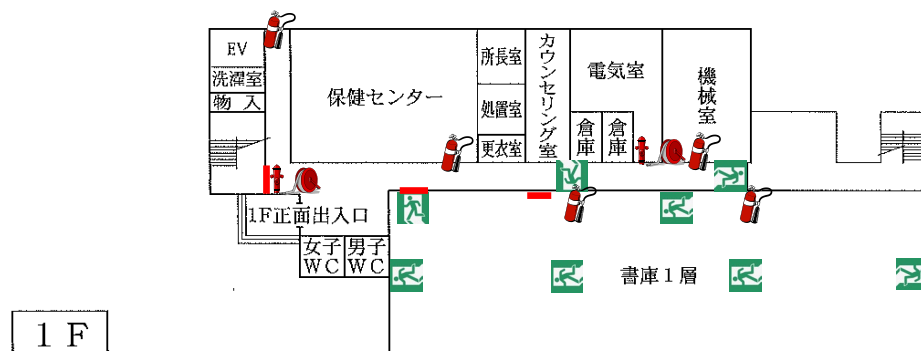
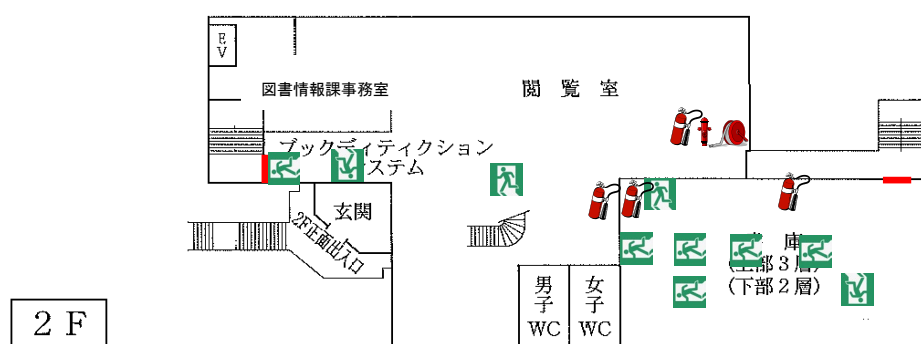
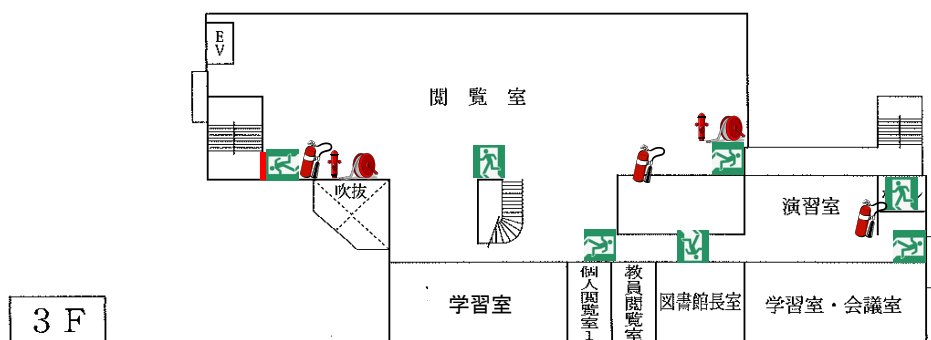
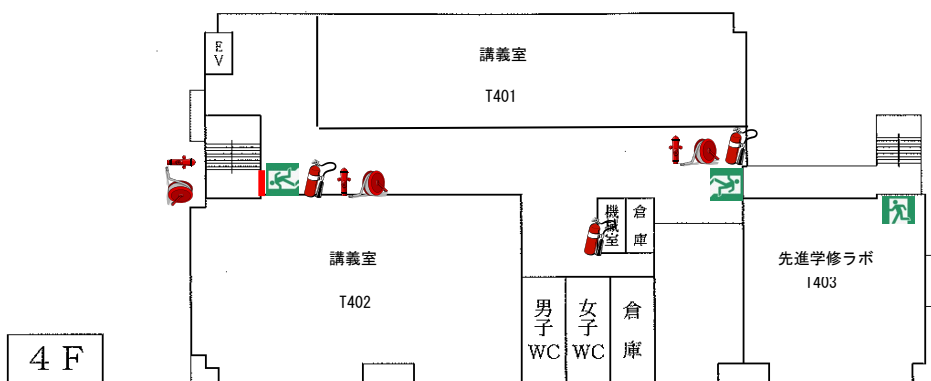




-  : 消火器
-  : 消火栓
-  : 防火扉

-  : 誘導灯
-  : 連結送水管
-  : 避難器具
-  : 火災報知器

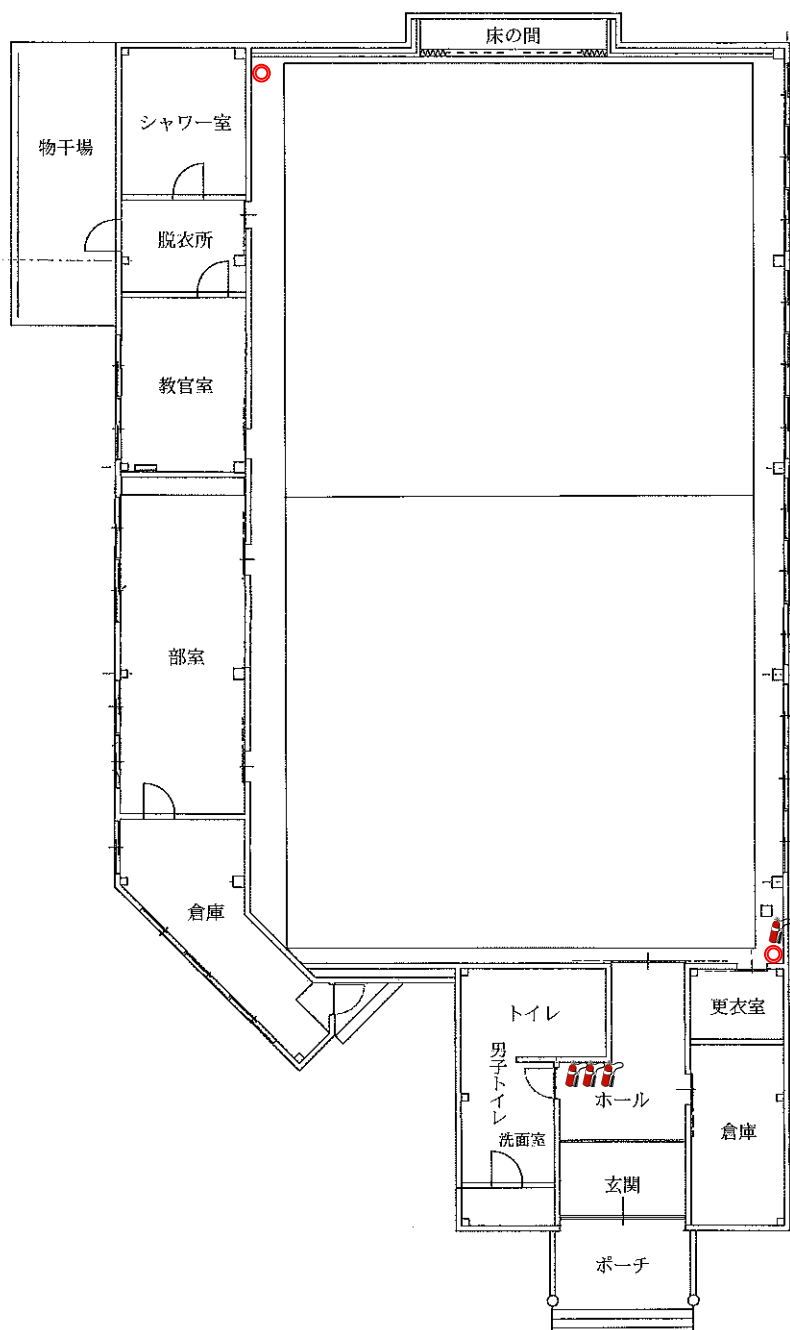
図書館の消火設備



-  : 消火器
-  : 消火栓
-  : 防火扉

-  : 誘導灯
-  : 連結送水管
-  : 避難器具
-  : 火災報知器

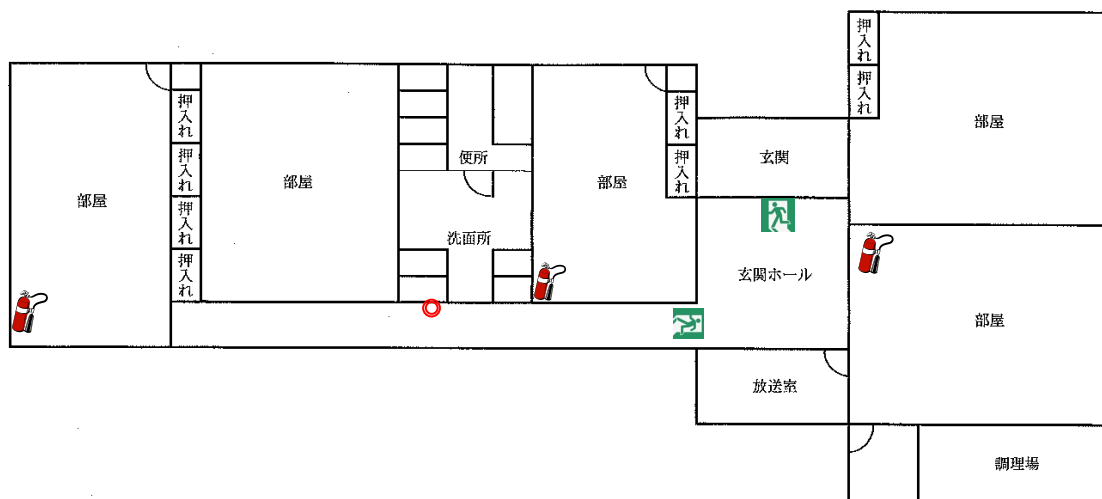
光武館の消火設備



-  : 消火器
-  : 消火栓
-  : 防火扉

セミナーハウスの消火設備

-  : 誘導灯
-  : 連結送水管
-  : 避難器具
-  : 火災報知器



-  : 消火器
-  : 消火栓
-  : 防火扉

売店棟の消火設備

-  : 誘導灯
-  : 連結送水管
-  : 避難器具
-  : 火災報知器

